倭訓栞中編 安之部 一

和書門
類 三六七二三
號 一二三
函 三
架 六四
冊

内閣文庫
和書 類
三六七二三 號
六四 冊
二六三 函
二 架

内閣文庫
番號	和	36723
冊數	64	(35)
函號	263	7

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
colorchecker
x-rite

国立公文書館
National Archives of Japan

倭訓栞中編巻之一

洞津　谷川士清纂

阿の部

あいさ　万葉集に秋沙とかけり鳧の類也といへり秋すゝ
めるとりて名とせしなるべし又朏長あいさ神子あいさ小あいさ黄
あいさ嫗あいさ鵜あいさなどの品ありわかさまゝあり和名
抄のあゐ月乃ひかりによそきかりて波たつあきされ音のさやけさ

あいろ　文色の義なるべしあやいろのつくぬなとといへり又あやいろ
にいろとも見えたり

あいだま　源氏に細流にあまえたるさるなりといへハ恵
遊戯の義にや

あいつじ　倭名抄に山榴を訓せり秋羊躑躅の義なるべし紅に
あかくもさくつじあるや節用集にハあきつじとあり

あいぎやう　愛敬の字也といへり○侯家のよめ入に愛敬のも

日本政府図書
浅草文庫

なり姫のえらにかくてしといへり○年魚の名にもいへり鰻鱺ハつく
り字也鮧鯷の字なとにも同しされハ壒嚢抄にみえたり年魚
の勝とよめり併多くハ年魚のことゝなれりつめて乾たるをのせり
といへり
あいさそふ　源氏物語にあいたちなしとはすゝろにといへり愛立
無の義なるへし書經に立愛惟親といへり愛に溺れて理にさかふと
いふに同しといふなるへし
あいなだのみ　源氏にも見ゆたのみなきを也といへり无愛なるの義歟
へしと諺にも若やだのみまごもなきといへり
○あるまじき　鶯宿梅とあり拾遺集に内より人の家に
侍りける紅梅をほらせたまひけるに鶯のすくひて侍りけれは家乃あるし
の女まつかくそうせさせ侍ける
勅なれハいともかしこし鶯乃宿ハとはゝいかゝこたへん
かくそうせさせたれハほりもせすなりにけりとみえたり大鏡にハ村

上帝の時内侍貫之か女か姫の住所也といへり一説にハ後鳥羽院の
時といへり其園の跡ハ二条林光院也ともいふめり西行談抄にみえ
けなりとも記せり○奥州に鶯宿村あり温泉あり
○あをの　青野の義也青野か原ハ美濃也源顕家の桃井土岐
等と戦ひし所也
あをと　倭名抄に青礪とみえたり姓にもいへり今呼てあ
をとといふ對馬の青砥あり○六帖に出羽なる青砥の関とよめるも青
砥左衛門藤綱ハ鎌倉大日記に正嘉元年十月召出さる政乃補佐乃
為也といへり滑川乃事ハ人口に膾炙せり北条九代記に時頼朝臣三嶋
詣の日片瀬川の中にて牛の尿をしけるを藤綱みて哀と思ひ守
殺の法佛事乃風情しける牛なとも殺られて侍るも手足と同しく
されてこそ此救日に為るへしとて田畠枯まて民人悲むに此牛尿せ
ハ田畠をさへ荒すてあらハ川中にて捨流しつることをよひたる後に
時頼の聴に達し感して召出せし事なと記せり

あをな　日本紀倭名鈔に蕪菁をよみ古事記に菘菜をよめり新撰字鏡に蔓又葑も同しく訓せり

あをね　青根の義藻塩草に万葉集の山菅也といへり○大和に青嶺あり

あをのり　青海苔と云倭名抄に陟釐と訓せられし陟釐は水苔をいへり其のりに似たるもの也大和櫟本の池に多し又紙にすけるを本草にみえて陟釐紙といふ朝鮮にもあり倭名抄の河苔紙也

あをくも　祝詞に青雲のたなびききはみと見えたり

あをやる　文選に清熒を訓せりあをみやるなるへし

あをごま　万葉集に青駒とよめり驄也といへり

あをはた　万葉集に木旗の上をかよふとはきこえ忍坂山なともつゞけたり木のしげりたるをひのなまるにて青き旗をたてたることくいへるをたとへてよめる也といへり常陸風土記に赤旗青幡とみえ礼記に旆

旂青旗なりとも見えたり

あをざし　枕草紙に見えたり抄に青麦を煎て調したる菓子也といへり大和故事に青麦を煎て臼にて碾き其よりたる糸のやうなるを青ざしといふといへり美濃の旅行にあをさしに八月ころもかしなれば伊豫にてはさまさうといへり○俗に銭緡をまたく縒るをあをざしといひて緡のるなるふかなる也

あをやま　神代紀に青山とあるは枯山に対しいひて春夏生長の時をいへり○播摩風土記にもあり赤人家集にも家集には山川とあり

あをがへる　倭名抄に青蝦蟇とよめり又土鴨ともみえたり新撰字鏡に蝦を訓せり埃嚢抄にへかへるの名當かへるといひ名也といへり

あをきとり　青鳥也西王母のたよりなりしより使をいへり

あをばもの　古へ新嘗に称して以て白歯者の義といへり武者も青しは歯を染しよりて平家物語に平忠度の事を以て内なりて入れ

ハかまぐろ也とも云る万松院穴太記に将軍源義晴乃まうとの盃ましても
きおらんとありし一説に六樹の赤しれ歯年といふとして青黛は志れ
などせしとそ○又甲冑とききざるをいでたちとま黛ふ志とゝふとそとぞ

あとぶきは　神名式尾張國愛智郡青衾神社なり今熱田境内
にまします又白衾神祠なり青和幣白和幣なるといふ春日の末社
に青賢木明神辛賢木明神なりこれもまさしく青ふぎて白ふぎてとなふ
ることとぞ

あとざめは　面色のあをしなせさるをいふ蕪村集に見えたり

あやきみや　青宮也玄武をいふ

あやかづら　倭名抄に防己を訓せりあを葛の義延喜式に防己を
かもとつづらと点せり万葉集にあをつづらくりいれてとありと
ほどらふぢといふ也○ほそのかづらといふは防己の一種なれのを
かづらといふハ漢防己也かぶりうつらハ木防己也とぞ

あをぞのふえ　青竹の笛ハ高倉宮の秘蔵なりし桃に阿補縛（アホハ）或ハ

阿呼（アヲ）といふは漢に翻して奇哉といふ詞なりとぞ○柯亭笛ハ
宗仁親王の伝へ給ふ所にして歴朝の珍器也

あをきふむ　踏青節といふ也

あをそのやま　古事紀に青葉山なしくとり宇氣比しあを山を
いふ也万葉集に水をあをの山とつけるハ青羽の義にいひかけ
たり鴨の羽色のあを山とよめるがごとし又義丞集に鴨と青羽に
といへり○若狭にもあをのちせれ山と同じ○原氏にも青色細流に為
にあをらん夏山とよめりと云

あをそのさゞれ　青蓋也卯月朔日に大内南のかどへそゝろ
柳とて北向に二株生ひたるにかけ言日の義にとり入たまふとぞ

○あかゐ　佛に供る水を汲の井なれば阿伽井といふ也○三井寺
のあかゐの水ハ灵水なると行ふ人織多をきめるに忽雨ふる○閼伽
井宮ハ宗尊親王にいふ西京の御院也とぞ又亀山院皇子道性を
もいへり紹運録にみゆ○赤井の杉ハ山城乙訓郡赤井村にあり日本紀

略に宿赤日御厩といふも是成べし

あかぬ　不飽の義前の例に多くよめり

あかえ　明衣とかけり清ゆかはりといふ也と三箇重宝抄

にえくさり

あかご　赤子といふ倭漢名称同じ

あかめ　神代紀に赤女と出て鯛の名也といへりよりて よくゐるや不得預天孫之餌ともいへれど鯛ハ伊勢にて神代 とはいはれて沖津鯛也といへる説志かるへきにや○西土にて八赤ちの小なる鯛もいへり

あかご　華厳経に阿伽陀薬とみえたりあかごハ丸薬の梵語なりといへり又阿掲陀に作る阿ハ无也掲陀ハ病也ともみえたり○尾張に米粉を丸くし汁にてあげたるをあかごといふ津島に由緒ありていふ赤団子の義也といへり

あかうら　日本紀に瞱字をよめり又敷といふをよめり竒にかゝる

故とめとも神賀辞に赤玉のかゝやきまさるも赤かれる状にめとも みえたり○後紀にあかくくとかゝも明らか義らく又まさ也

あからむ　日本紀に熟字をよめり○霊異紀に態字をかゝ

あくとよめり

あかふと　伊勢度会郡今一色の漂船上蝦夷あつけしの湊に着し時凡て一村に城あり十間四面なかりの木をとりて四方垣を造り内に石を入あり敵攻来る時ハ籠城し城内より多くの石をなけ石とおといふ甚敵ハ赤ふと地上に蝦夷と地つゞきなれども往来なしとそしまて小児をおどしにハあかふといへりとそ

あかもて　万葉にみゆ赭面也

あかまう　亜瓦的革とかけり今ハ馬瓦的革をもて南亜墨利加の内也といへり

あかだま　神代紀の竒にしる白明玉也又赤玉也説文に瓊ハ赤玉也とみえ古事記にも赤玉に對して白玉をいへれは赤玉とさゝも也○大和

芳野吉水院に明玉あり後醍醐天皇御冠の中に籠めさせたまふ
といひ伝へり○筑前の一社に夜光珠あり朝鮮征伐の時一侯の獲
てゆれる物也といひ伝ふ○三河にて一村に假山を造るとて一堆石を
ほらし玉あらんと磨塚をほる事三年にして果して玉を得て奉
の大さ也転はせば志ぐれのふる音す今禁中に奉納せりとぞ○大
和法隆寺の近辺摂水菴の海恵七七日の祈祀して感得しける
玉あり円形明白光彩射人甚大如桃也とし藤門周斎語也

あかいろ　源氏にも見ゆ延喜式に赤白橡(ツルハミ)とみえたり西宮記に
赤色主上及一上卿内宴時服之とみえたり

あかがり　倭名抄に皹とあり垢にきるゝ体の名ならば反る也
催馬楽にながつてふむなかしらなる子とみえたり篠葉集に
あかゞりふむも来いこちにかへれかし見れば其の穴のかしこまりむしるも

あかさか　赤坂の城は楠が築く所河内にあり○美濃にも赤坂
あり○参河にも赤坂あり力寿は赤坂の娼にて大江定基のおもひ

人也

あかまつ　松の一種にいふ群芳譜に赤松とみゆ○元弘の初
赤松則村播磨にて起る因て名とせる氏也世々佐用荘赤松に
居たるをもて氏とせり

あかなす　蛮種也其肉は柿に似たる草生なる物をいへり紅毛
語に馬瑙をあかあくとそてかんといふをかんは石といへり

あかゞね　銅といふ赤金の義和銅元年武蔵国秩父郡より
始て貢せり

あかづき　源氏にみえ閼伽の坏也山家集に
しきみ置あかのをしきのふちなくは何にあられの玉とまらまし

あかはぢ　赤恥の義あかは露をれさるやうにいふ意かくなるを
いふも同じとや

あかるたへ　祝詞式に明妙照妙とみえたり神服の名也五色の
絹布を奉るは色に就ていふ也

あがりとの　官奴婢とよびし中世の詞也○あがりやの称も是より出たる成へし

あからがしら　生れつきて頭髪の赤き人なり○荒田に生る小草をもいへり新撰字鏡に(?)灌生をよめる也

あからうま　倭名抄に騂をよめり騂をとよめり止雨祝詞に赤毛御馬一疋とみえたり○赤騂と書ハあかげをいふなり林氏ハ騂と柑子あかげとす まさ白あかげなり

あかつきおき　名目にいへり雞鳴起の義曲礼の文也

あかつきぐさ　暁種の義鐘をいふとぞ

あかぞめのもん　拾芥抄に應天門をもと名つけし是ハ花山院遁世ましませし時此門よりして脱屣したまへハ不祥の例とする也筑紫に依てなりといへり

あかしそぶね　赤小舟也あけのそほぶねに同しといへり万葉集によみ也

あかゞしは　萬葉にあからめ柏とよめりて要く家持歌合に

志しるしのありつれりある故れし山ハあかめ柏もとつくれあり

◎小野天神霜月朔日の祭とあかめ柏といへり借御を中といへし

又四月の借御と青柏といへ資子内親王家歌合に

君がため秋とり山のもみぢしも万代までにかえはさりけん

あかむらさき　深紫にて日本紀に赤紫とみえ深紫をいふなるへし

あかきのかみ　式に上野国勢多郡赤城神社とみえたり縁念右大臣集によめる是也

あかきとどの　四季物語にあづき粥を赤きといへり古事に是これハ高紀也のかくてのもあかきれぬ御代におほし

あかてふぎて　祝詞に明和幣曜和幣とみえたり

あかけのたか　綱懸の義也巣籠に對していへり

野などにあるをいへり也山かくりハ網をそとられるをあげけとハい
ふなるべし

あかりしやうじ　明障子也唐山の牕なるべし新千載抄にも
よめり夫木集に為氏
いかにしてのいぬきうかひしもあかて能なりしやりしとれなひし
是ハ源氏紅梅巻にみえたる名なりまてにいぬきハ人乃名也○まて
まけにぬりこめなかりさりしとみえたりぬりこハ塗子也○障子
紙ハ天工開物に櫺紗紙とみえたり

あられやハせぬ　古今集にみえたり　僻案抄になかれしとある
ことゝぞ

○あきら　利末亜洲に有鳥名亜既剌乃百鳥之王也羽毛黄黒
色高二三尺隼飛極高巣于峻山石穴内生子壽最長久性鷙猛
能攫羊鹿百鳥食之有毒蛇能害其子則知先尋一種石置巣邊
蛇毒遂解と一書にみえたり

あきつ　日本紀倭名抄に蜻蛉をよめり秋に出る蟲の名
くわしとおもわれし秋津虫とハ名つくる也なきの羽といふも同し羽
例をそてあけつといふハ誤也新撰字鏡に蜩もよめり二合字なし万葉
集になきかはをなそでふる妹とよけるハせみの羽衣といふなるべし○
あきつの小野ハ大和にあり蜻蛉によりし名の故事雄略紀にみえたり

あきじひ　青盲といふ目明らかにして見えぬをいふ也倭名抄に
清盲とみえ霊異記に精盲とみえ新撰字鏡に矇とよめり

あきまた　嘉武天日記にあきれまたとみえ住吉物語にあきれたる
事に口うちあけてとみえたり呆字なる也呆ハ口を開けておかる居
ろる也とそり或ハ娭とよめり字書に止也と注せり埃嚢抄には
烟字をよめり或ハ瞠若と譯を或ハ吃々と譯をを

あきなひ　日本紀に商價をよめり秋なひの義新撰字鏡に估
をもよめり又賑をあきなひともかりをよめり野必叢書に物熟
謂之秋取收斂之義とみえたり

あきとの　賈をいふ秋ハ布穀成て高賈のたよりなる時なれハいふなるべし白虎通ニ居賣曰賈通物曰商と見え
あきびと　倭名抄ニ商人とよめり又賈とよめり
あきなひ　新撰字鏡ニ賻とよめり注ニ買物遡(アラカヒ)付銭也市買先入曰驗とみえたり今あきなひといひ入銀といふめり
あきつけハ　万葉集ニ秋就者とかけり秋のきたるの意也
あきれしも　歟とよめり明衡か松の詩ニ呉人劍色掛秋霜とつゞくより万葉集ニ
秋の霜かけなる松もあきとぞしるむかしよりちきりけむ名かしらん
呉季札の故事也
あきをさみ　阿祇奈君とあり姓氏録ニ日本武尊の孫也とみゆおほしかりことニ永正中近江滋賀郡松本ニ土匠阿祇奈君といふ人ありといへり○古事記ニ葛城長江曾都毘古者阿藝那臣之祖也とみえたり

あきおこり　万葉集ニ高おこりとみえ商人の如しといひしハ助語とりハ懲の意也
あきの市　西の市ニたゞひとりいでゝ目ならべず買てし絹のあきおこりかも
あきのたるほ　神代紀ニ秋垂穎とあり五穀の穂のたるゝをいふ也
あきまつぐさ　夏田をいふ基俊
○水かけて秋待草のよわりしに露とえゆるはしらぬかも
あきしるぐさ　秋知草の意萩也と類聚集ニみえて後成に乃哥あり
あきかせづき　秋風月の意八月をいふ
あきたれども　源氏ニみえあくまで飽いふ語ニあくがれとするニ同しといへり
あきのなゝくさ　秋の七草也七夕の七草ともいへり哥ニ
萩が花をばなくずはななでしこの花女郎花また藤袴あさがほの花
あきさりごろも　秋去衣と万葉ニみえたり秋ニ用るも七夕の具也

○㊁秋さり姫ハ七夕の異名也といへり
○あくた　芥とよめり雨に腐もの義なるべし あくた火 あくた川
和名抄にあり○倭名抄に蚖とよめり○㊂あくた川 伊勢物語にみゆ
延喜式神名帳に摂津国嶋下郡阿久刀神社あり此辺の川なるべし
あくと　三議一統にいへるきびすをとせり今もあくとといふ
又あくともいふ
あぐむ　物にあくむといふ倭俗ハ飽悪の義にや或ハ倦字をよ
めれど字書に倚也とも傲也ともみえたり倭俗の義にあはずとし
○あぐいといふも同倭なるべし 童蒙頌韻に餘とあぐしといへる也
あぐり　漁人の網操の義なるべし○氏にもいふ和泉和泉郡
井口村に古驛雑辛職阿栗氏の遺蹟あり
あくち　倭に吻に小瘡の出るをいふ赤口の義なるべし あくち
雀あくちもきれぬなどもいへり
あくたび　芥火の義 海人の芥をあつめてたく火也三浦にあ
とによめりといへり
あくりぐろ　東鑑に馬の毛色にいへり○あくり紅ハ烟くり紅也
蛬の縄こくいさり舟といふ義也
あくたがは　芥川の義溝を溝といへりとぞ 古今集灌頂に堀川
の異名とせり 津国の嶋上郡の西にもよくへり金葉集に
津の国のなにはわたりやハんとあくた川みともつきせてハなてしも
式阿久刀神社芥川村にあり
あぐみよする　神代紀に寛座とよめりあぐみハ足組の義なり
古事紀に趺坐ともみえたり
あぐるこころおひ　黎明遅明なともよめり
○あげた　神代紀に高田とよめり高き所也万葉集に水と
多き上(アゲ)に種まきおくとあり
あげて　擧字をよめり又勝字をよむ廣韻に擧也とみえたり
あげつる　神代紀に挙鉄とみえたり古事紀に走振て上(アゲ)鉄ともも

うんて歌の節をとるなるべし

あげだま　上神の象冑の息出の穴なりといへり神ハ正直乃頭に
やどりたまふといふによりてその穴をさして八幡座と名づけ其廻輪（メクリ）
を忌垣（イカキ）と称すといへり

あげむま　東鑑に馬長とみゆ又揚馬ともよめり馬上にて神
社にまうでなどするなるべし

あげごと　捧物也といへり古今に
七夕にかさんと思ひしあげごとに手折れる花乃名乃ことにきゆるかな

あけたて　戸の戸をさしていふ詞也祝詞式に開閉とみえ傳信録
に啓閉と見え西宮記式部日記にも見えたり毎夜集に
あけたてハまりさかひもぬいとまつとたてあけれハおもひいけるかひ

あげたぶさ　上畳の義也髪乃上にて又髪を髪といふ○今上髪の
上にて結髪を髪を上に髷を髪の古例によりて上髪の上乃つりを
別にむすぶハ結髪の代也といへり

あけちあき　伊勢物語に見えたり今もいふ所にて枕を離るるを
いふなるべし

あげつちもん　應仁紀に上土門と見えたり今あつち門といへり
両方より土を築上たる也○土平門ハ東鑑に見えたり禁中にあり○
土椽門といふも同じなるべし

あけのたまがき　赤の玉垣也赤ハ赤木の義制まつるをいふなるべし

○あこ　阿胡根浦万葉集に見えたり網児之山とも見えたり志摩国英（ア）
虞（コ）郡也といひ紀の温泉（イテユ）に往まひし時の歌なれど若の浦をいふといへるも
あり聖武天皇の時若の浦を明光（アコ）の浦と改めさせたまひしも據あり
又天安元年文徳天皇住吉に行幸の時業平供奉せし此時明神の
託宣に
ありそも見そかくるか神乃世をあこきの浦のむかしなりけり
業平返歌奉る
いせの海やあこきが浦のいかなくとふても人しりかへりそあらん

今阿胡根神社と記しあやまれり天瓊矛のしづくのつもりしといひしこと
と○あこぎの歌は万葉集にあらず山城也
あこぎ　伊勢安濃の津に阿漕が浦あり太平記に安濃と
こゝにもありされば備後の穴の郡を後に安那とするとなりてやゝ
おなじく駿河の焼津郡を益頭とかきしよりまづとなりぬなる
うや六帖に
　逢事をあこぎの島にひく鯛のたびかさならば人もしりなん
是はあこぎがうらによめるにやあらぬぎ也又上句は下句をいはん料
までにてひくといふにかけたり度かさなるとよみたりなほ後は新
後拾遺集新千載集などに見えたり又文徳実録に伊勢国安濃郡
人凡工仲業賜姓安濃宿祢神魂命之後也とみえ古事伝化記に
曙立王者伊勢佐那造之祖とみえ姓氏録に神魂命八世孫阿居太
都命とみえ又大椋置始連曙立命之後也とみえて神名式阿濃郡に
置染神社あり神名式考証に産品村にありとあるは産土の神とせ

し也○あこぎ塚は津の浦にあり上宮寺とあこぎ塚ちかしといひ寺内に
阿漕社もありしが此塚を俗にあこぎの平次といへる者の塚なりといひ
伝へたり謡にも此浦の魚は皇太神宮の御贄に献ずるとて是より網を
漁ことを禁ずるといへる所は天延元年安濃郡を皇太神宮に寄奉られしも
見ゆ九代実録にみえたりことはさもあるべし丹波福智山のほとりにも
あこぎの平次が城趾といひ伝ふるありといふは平次は丹波の人なりとも鷲
尾家は高望王の裔孫貞衡を阿濃津三郎とも号す其子貞清
貞清が嫡子を鷲尾太郎家衡と号す伊勢に住す一子を桑名二郎武
久二男を鷲尾次郎清綱と号す丹波に住して其子孫より此鷲尾
次郎を平姓なれば平次と呼なるべし中古の末の俗呼なるべし
もまた多し寿永中に義経に従ひし鷲尾十郎清久を郎清綱次
男なりとぞ十郎が家は摂州八田郡山田庄原野村にあり今に其子
孫存在せり其家大同年中に建てしといへり元禄の比鷲尾愛[illegible]
義久といふ○其におこぎといふもありこれらに似たり

なるしゆるかな○　霊異記に可哉とよめり
○あざ　倭名抄に疵とよめり痣と同しきはやまさきなるは
体に交りたるしみのそれをいふ也なりあざハ赤誌也
あさ　浅くの衣下れあさと略せる也
あざか　神名式に阿射加神社三座大ところ伊勢国一志郡小阿
坂村にあり古事記に猨田比古神坐阿邪訶時為漁而於比良夫貝
其手見咋合而沈溺海鹽故沈居其底之時名謂底度久御魂其海
水之都夫多都時名謂都夫多都御魂其阿和佐久時名謂沫佐久
御魂といへりされて此三座を祀れるよし也○今大阿坂小阿坂と二邑になる
またところも大阿坂とも同しく社なりされとも今ハ山にはなれたる倭
姫世紀にみゆ應仁中に小畠氏こゝにて城を構へし時に今のところに移せ
り山の上方に池あり方五十間ばかり是大神漁したまひし所
といふ今も祭りにハ魚を供ふ又大阿坂山の西乃麓を黄方谷
といふ是世紀にいふ藤方片樋宮の地にしていつきまつる神ハ大蛇なるへし

万葉集に
あふちて散るさくらのをやめて野末の山乃うつろひぬらむ
阿坂の城ハ永禄十二年に信長公に攻落さる其時先手ハ木下藤吉ハ
秀吉なりしに股を射られしといふ○奥州のあさかハ安積とよめり
あさむ　日本紀に諫とよめりあさむとよむもあさむかるゝとそ也又
要とよめり
あさぢ　倭名抄に鯫魚を訓し後れ乃守によめり江海の
ろうに居て扁形濶腹のもの也鯫魚もそハ和ひ名の方そいふとも○
日本紀に浅茅とよめりあさちハあさちかやかなといふ是也またそれ
のちいさきをいふ也○あさちふ山ハ對馬にあり万葉集によめり○
あさぢふやとハ浅茅生る宿也○浅茅原ましゝの玉襷とよめるハ名
所にあらし
あさき　浅木の義今もいふ也端山の材をいふ歟へし千載集に
東屋乃あさきをしら和なかしいつうしあれて...かりけん

あさよ　鹿のなちこむるをあさよとはさしよまいふといへり

又堀川百首に

霧立はあさしれ射手の志るしのろかる俤しきけさえまみえぬ

あざれ　土佐日記にあざれあへりといへり源氏物語にも多し孟津抄に戯礼さるるといへりあざれはふざれども同し如くし字ア日記にあざしせさまふといふも同語なし

あさま　口伝にいふ浅間の名あさばともいへり○駿河甲斐にまたれ浅間神社あるにつきて駿河にては八文字音とりてよみり三代実録に駿河国言冨士郡正三位浅間大神大山其勢甚熾焼山方一二里許とみえ伊勢の朝熊もまた同名なし冨士の神は木花開耶姫命なりし一宮記にもみえ朝熊七社の中に櫻大刀の神あり名所に記しの祖はひしろむのなりひとて経時志る山とて加那○世に其名を専らにせるは信濃佐久郡也天武紀に灰零于信濃国とみえ此嶽高峻といへる驛路其肩をめくり路をまへ人を志き

たとしては浅間にありて深邃とえたる所なり名にや絶頂に大坑ありて径十町ばかりあり煙立のぼりて硫黄の氣あり大焼の時は五七里が間鳴動し茶碗皿等の類も響きて落ちることありといへり○業平の東くだりに伊勢尾張乃あさまのふもとにあるあさまを何とよみさるあれど二首ありはえたる武蔵上野のさかひにある方ぞ正しと見

あさへ　源氏いつりされは別條としるれは次に又あらし

あさひ　童蒙頌韻に暾をよみあさひ旭とよむなり朝日也○和名抄に名は上日とよめる訓せしも也○朝日九八叙の名後白河上皇の時佐藤憲清に賜はりし名也○木曽義仲を朝日将軍と稱せるは将軍に任しかとおもく亡びて其栄華久しからさる朝日の如しとてそ義仲は帯刀先生義賢の子也木曽路宮の越の名に屋形跡ありて巴が屋形のあと山吹が平ちといふもあり樋口が谷もあし兼平が父兼遠が屋形跡も上田に在る東鑑に木曽乳母夫仲三権守兼遠とみへ

るゝ兼平か住し所ハ六七里隔て今井といふ所也○朝日山ハ山城の宇治にあり朝日の里ハ名所也朝日寺ハ伊勢の飯高郡也万葉集にみえたり○姓にいふハ兼久の軍に朝日頼時など

あさごち　朝より吹く東風也

あさひこ　神楽歌にみえたり朝日也といへり古帖にも朝ひこのさしや岡辺をもよめり

あさくら　神楽歌に朝倉あり○和琴の名にも呼へり○越前足羽城主に朝倉広景あり

あさぬの　倭名抄に麻布とよみ唐式にいふ紵布是平といへり

あさはら　甲斐人の姓朝原とあり増鏡にみゆ小笠原の族といへり○浅原八郎源為頼なりハ島津家の家臣太平記にみゆ後世或ハ疵腹に似るハ甚禁中に自殺せしより氏を改め呼る者也

あさまし　浅き也ましハ助辞又まし反み也これを倒して語の悼くいへるハなりしそ家語に

志かりとてあさき心も世にたゝるを浅し事蓬乃あさましけれ世や諺に曲られハ世にそむくといへり世説に王光禄如屏風屈曲従俗能蔽風露とみえたり○略してあさまともいへり

あざれ　倭名抄に鮾をあざるとよめり表腐(ウハクサリ)の義なりハ反なる也魚の敗れたる也新撰字鏡に腤とよめり

あさがら　麻柄とかけり古語拾遺に見えたり麻の茎をさらし乾たる也○木の名に呼ハ三四月に白花あり大木もあり○白雲とよみしも其葉の似たり

あさかで　万葉集にみえ浅堰手の義也

あさかげ　朝日の影也万葉集に朝影に吾身ハなりぬといへり細く瘦るゝこと也蒼衣万葉人先集にもいへり

あさそう　万葉集に浅とよめりてハ助辞也又浅茅の義にや

あさひな　安房の郡名駿河志太の郡名に朝夷とかけり朝方に太山あるをとるけて朝日と称せるにや古き名なるべし○朝夷三郎

義秀ハ和田義盛の子幕府を攻し時安房より高麗に赴くと延宝中朝鮮より質せしに報して以ス朝鮮釜山浦絶影島に義秀の祠見在す土人時にあらそ又聞木曽に匿し住て今其裔なり是毋家巴か跡也ともいへり

あざらし　倭名抄に水豹をよめりかいうそ比の如く毛白くまだらし也といへり東鑑に七間間中径水豹皮六十余枚とみえ又さすけに六位の尻ざやに用ふしとみえたりけり蝦夷言ハ也今も蝦夷より出て皮を用ふる具也小笠原家に射礼の具ともせり◎山東志に海豹出寧海其大如豹文身五色叢居水涯常以一豹護守如雁奴其皮可飾鞍褥とみえたるハ水豹と同物にや所説ハあしかとひとし

あさくつ　浅履也平生の不用にして今木を用ゆるとぞ華※へしといへり

あさねがみ　万葉集に見ゆ朝寝髪也

あさはふる　万葉集に見ゆ朝羽振とよめり又朝羽振風こそよらめゆふ羽振浪こそ来よれともみえてあさはふるハ字義の如し

あさぼらけ　万葉集に朝旦とよめり朝ほがらし也かハつけていへり

あさづくひ　朝の日也づくハ色づく也といへるが如し依附の義也

あさまだき　朝速くの意也

あさぎよめ　朝に起て必まづ洒掃すれハいふといへり

あさとがり　朝の狩也夕がりともいへり

あさにけに　万葉集に見ゆ朝に暮にの義くれ反け也

あさとで　万葉集に旦戸をよめり戸ハ闘なりてやハ助也

あさちげ　下学集に日出草とよめり

あざなへば　糾字をよめり縄なといふ交へなふる義也日本紀の訓にあざなはりとよめるもまさしくつなかりけりはあさなへる也へるハ反なれは縄となふといふが如し

あざわらふ　神代紀に笑嚱をよめり囂（アザ）も字の意なるへし又

嘲をよめり

あさがしハ　朝柏とよめり万葉集に見え日本紀竟宴公望
ぬかづしハきこしめさずもなわけなりき世民のしんをおさめずて
と云ハ朝の借字と聞ゆる也夫木集に
あしひきの山の朝がしハふりやしくれ乃いろにも作し
これハ朝しくれに柏の色つくをよめり

あさけのかぜ　朝明の風也あけとよむハ古くより云
万葉集にハあさとこ古今集にハつれなくなき宮城の名也○朝食
と朝明郡によせたる前長明が記にみえたり○続日本紀に車駕到朝明
郡万葉集に朝明行宮こハ伊勢也今郡の内冨田村松原邑に聖武
天皇を祠まつり御製歌に
妹にこひ吾乃松原見渡せは潮干のかたにたつ鳴わたる
とみえたるに据るなるべし○後一条帝寛仁元年奉伊勢朝明郡
於太神宮と小右記に見ゆ

あさがほひめ　織女の異名也といへり是七夕の哥にあり牽牛
子の異名とも用うといへりされと牽牛の名によりて此異名を用ひたる
なる歌もかくよまるなるべし

あさひのみや　内宮と申奉る倭姫命の朝日来向ふとのたまひしより也玉葉集に伊勢遷宮の年よみ侍りける　祭主輔親
神風や朝日の宮の宮うつしかけののとかなる代にあひにける
兼久三年八月のみなるべし○大坂松原町に朝日社あり義経四国渡
海の時朝日に向て天照神をおがみしといふ盛衰記にみえたり逆櫓の
社ともいふ也

あさづま　○とは坂田郡朝妻の舟ありといへり

あさのさごろも　麻の狭衣の義也たへの也せみ布衣也倭名鈔
に紵布をあさぬのとよめり僧霊徹が詩に麻衣草坐亦容身と
○みえたり

あさまのそら　まその空なりといへり　惟則

鹿とは川船まつの木をかゝむるは浪路のかたくくゝるにかよふ

○あしか　本朝式に葦鹿とみえたり海驢の義なるべし正徳の韓使に一醫此をとふらるに彼答ていふ海鹿也とこたへしとぞ呉都賦にいはゆる潛鹿なるもの志にいふ海獱也といへり騂騮駁の類ありといへり島嶼に出てよく眠るもの也群れて一ハ眠り一ハ守りて護ること雁奴のごとしといへり紀の日高郡西南の海中に葦鹿嶋あり年ごとに秋より冬まで多く彼嶋にあつまりて岩上に眠るといへり○うみおそと称するものハ海参の類にて其大なる者海楊枝と称せる膠也といへり獣にハあらずと○かせあしかといへり海豬也といへり海かうともいふ名なり○中山伝信録に沙魚躍岸化為鹿鹿食熱以舌咂水亦化為沙魚とみえて本草にも鹿沙とみえて鹿に變ずるよしもあれどなしとをいふべし○仲正集に

秋霧ハたちしら浪行ちがふ舟のあしかもかよふなみのうへにて

○飾抄に諒闇の鞍には葦鹿を用らるといへり

あじろ　○今云　簀とよめり新撰字鏡に箔をよみ倭名抄にハ篇とよめり網代能の義なるべし○伊勢河曲郡に阿自賀神社見えたり或にいふ

あしだ　倭名抄に屐をいふ下学集に足駄とかけりされど筆名苑に一名足下といへるによれる訓なるべし新撰字鏡に木ぐりとよめり木屐ハ漢名也中山伝信録にハ木套とかせり二板といふも見えたり○雁屐をくつけのあしたとよめり宇治拾遺に平あしだみえたり田楽記に高足一足といへるハたかあしだを略せし也○海人藻芥に塗足駄唯雀とみえたり捜神記に初作屐者婦人圓頭男子方頭蓋作意欲別男女とみえたり我邦の制も見ゆるにや○和名抄屐系あしだと見えて本草云屐鼻縄といへり

あしや　葦屋とかけり伊勢物語に摂津国菟原郡也氣賴の原田と称しハ豊後国の葦屋浦也釜をいふハ銘あるによれり又越州よりいへり○葦屋君氏ハ姓氏録に見ゆ

あしと ○源氏にあしとよこそりかんのちとみえて 枕草紙に
ゆきてまはりつゝさゝめくらんくらうなれとも猶そとよむといへり
あしつの 古事記に若葦と見ゆるに同し ○あしつの丸浦ハ
細流に葦の生たるに和歌の浦をよせたりといへり
あしつき 万葉集によみ葦附とかけり拾遺に水松の類葦根
につきてひつきてはゆる水草也といへり
あしかり 文選江賦に蘆人とみえ蘆を採る者をいふ
あしかひ ○神代紀に葦牙とよめり葦のめをいふ 萬葉に芽に同
し万葉集に葦若末乃足痛吾勢とよめり 古事記に阿斯訶備
とみえたるはあしかひともよむなるへし
あしのや 葦矢也 追儺にあり殿上の侍臣桃の弓葦の矢を
もて儺殿のかたにたちて鬼を射るなりといへり
あしかも 葦鴨の義 あしたづに同し他の鳥にハ千鳥よりはと
いへり ○今一種の小鳧にして頬に巴の紋ある物也 ○はし鴨と

呼ものハ別種也
あじろや 網代帆也 さらぬも以に品字箋に多編竹為之謂
之風篷とある是也
あしかゞ 下野の足利の名といふ古事紀にかしもあかゞに作
まるといふてゐる也 ○足利家ハ本系新田と同し ○分類年代記に足
利義兼学校を足利に始めて唐土より将来る所の先聖十哲の画
像及祭器経籍なとを納むよって足利の学校といへり 其後百余年を
経て源尊氏西海に出奔せしに菊池と多々良浜に戦ひ討
嘿して孔廟を祷る遂に勝利を得て再ひ聖廟を建て崇奉し
祭祀怠る事なしと今浮屠氏の有となる世に小野篁奏請して
建る所といふハ非也文徳実録篁伝の中に下野守に任せし学校
のことみえさるといへり ○参考太平記に尊氏弑儲及君忘恩擅逆及
帝崩建寺薦福或作文或飾非欲以蔽人耳目可悪之甚者也とみえ
たり

あしなひ　太刀にいへり足合とかけり
あしがさ　新撰字鏡に屧をよめり又屐もよめり
あしかる　足半の義　輟耕録に西浙之人以草為履而無跟名
曰靸鞋といへり　信長公鉄砲に刀の鞘に出物を付られたるなり
軍記にみえて細川幽斎の従者のもの紐物落けしなからなりしより戴恩
記にみえたり大双紙にゐのけしなるなり田楽記に着藁尻切とみえ
しも出物なるべし
あしずり　蹉跎とよめり字書に失足也といへり万葉集にも
足ずりさけび又ふしまろび足すりしつゝ伊勢物語に足ずりをし
て泣く源氏に足すりといふことして泣さまといへり足摩乃義也
新撰字鏡に躑躅もあしずると訓せり
あしきる　刖又刖とよめり西土の刑名也
あしぎぬ　倭名抄に絁とよめり鹿絹の義也拾芥集なお名
ままえくさり

あしじろ　鉄砲にいふ足城とよめり　造作にいふ足代の義也
東鑑にみえたり
あしはら　葦原八葦のしげれる故にいふ○葦原中国は此邦の
名にして天つ神乃世にいふ天原より宣ふる詞にて天上よりの称せり
されどまた後にもいへるは天孫坐て後もなお天上にして呼なしくるもの
を宣ひし也何方も皆葦原にて其中に出雲八重にするとりてせり
とぞ○文徳実録に天安二年伊勢国葭原神社預官社とも西神
名式度会郡葭原神社なり難波の芦も伊勢乃浜荻といへる相
通するなるべし
あしがる　足軽とかける西土の書に軽足驃騎の称なり古くは付
候の侍をいふや衣川百首に
名をも射をかくるを恥しかりなまよかるくぬりていふ八足軽
撫談治要に昔より天下のみだるゝ事は足軽とあしかるといふ事八
舊記なとにまたさる名目也平家のかぶろといへるをそとくえめつ

国立公文書館
National Archives of Japan

らしき例(タメシ)にもためしともえて後法性寺殿の詠より出たる名
記せるにや明徳三年の軍令中にみえたり
あじろたま　車也といへり網代輿乃事にや
あしがなへ　三才図会に脚鐺とみえたり
あしすだれ　芦簾也字荀子にみえたり天子諒闇の時倚廬に
きつらうておろさるゝし村上院御記にみえてさまざまの物也
難波などにはあしすだれもありといへり今すだれあしといふもの八
葦ありといへり俗によしずといへり
あしがため　足堅めと云り家造の異にいふ庭訓往来にみえたり
○日本紀に以て軍行旅行などにおいて足を堅めんとて跋渉するを
いへり
あしそろへ　五月に賀茂にあり競馬の足を整ふる也流鏑馬(ヤブサメ)
体(ロヘ)といふも棠梧抄にみえたり
あしきもの　神代紀に邪鬼とよめり

あしとそろ　足と云の義後つかぬこと也源氏に人々あれ足をそゝ
せ又あしはそらゆく誰もしまかて跡ぬとみえたり
あしけむア　倭名抄に葦騅をよめり青白如葦色也と注せ
り葦ハ蘆の初生也といへり葦毛ともかけり万葉集に大方
青馬とよめり義訓なるべし新六帖にとをやしげの駒をよめり
杜詩に玉花驄といへるも是也○白驄黒驄月驄星驄鼠驄連銭驄
等乃名あり○拾遺集にあしのそるげのむまとみえたり葦の毛
毛にや黄驄馬をよむ和名抄にみえたり
あしのまろや　葦の丸屋也まろハ全き義全体を葦のまゝにておほ
らくさる也といへり
あしのとず　神代紀に葦船とよみ毛詩に一葦航(ワタス)之とよめり
あしのそぶえ　葦ハ笛也とそ笛をまちゐ也埃嚢抄に笳ハ葦の葉
と巻て胡人の吹物也といへり
あしのしれや　葦の篠屋乃義也といへり葦又篠をもて葺きたる

云ぬへし○あしのまつひ 葦や篠を刈て火把にする也
あしわけをぶね 万葉集に湊入の葦わけ小船とよめり
あしをそろへ 徒然草に足をそろへにまかる 傳燈録に翹足
とみえたり
あしすゑのを 大神宮式にみえたり
あしがらをぶね 足柄小船也 万葉集にみえたり又よぶさたて
足柄山に船木きりともよめる此所よりいでしをとりて名付くるにや足
柄山は相摸にあり又足柄の名をとりて名とせるにや新千載集に足
がらや小舟とつゞけたり○古今に
白雲のたえまやいつこなる山に跡もさためぬ足がらのせき
韓退之が雲横秦嶺家何在雪擁藍関馬不前の句によれり
あしよわぐるま 車をひく牛の足の弱きにいへるとぞ或は羊車
鹿車を指ていふともいへり
○あすか 飛鳥をよみつけて明日の香よりいでたり反正天皇

の都なりて古事記の下巻に委くみえたり万葉集には飛鳥(トブトリ)
の明日香の里とよめりさて飛鳥をかく訓せる事は荀子に若飛
鳥然傾側反覆無日といへり古事記よりいでたる事にて古
今集にも世中は何かつねなる飛鳥川とよめる此哥によれる也○
今は大和高市郡也飛鳥の里なりて飛鳥の社は里の東にあるを
延喜式にもみえたり甘南備山にありしを天長六年に神
のさとしの事に鳥形山に移しまゐらする由日本後紀にみえたれば
古く飛鳥の神南備山をもいひし也又にあるまで飛鳥寺の山号を
鳥形山といひし也本の名けし也今は式に飛鳥山口坐神社也飛鳥村
上方鳥形山にあり万葉集詠元興寺之里哥に
故々のあすかはあれとあをによしならのあすかをみらくしよしも
是は高市郡の飛鳥寺を奈良へ移して元興寺といへるをもてかく
よめる也○高市郡飛鳥坐神社四座飛鳥村にあり四座合殿也
貞観十六年格云祖神則貴而有封其裔神則微而無封假令

飛鳥神裔天太玉櫛玉臼瀧加屋鳴比女四神此等類是也と
いへる太玉命神社四座忌部村にあり櫛玉命神社四座真弓村
にあり加夜奈留美命神社柏森村にありあすか川上坐宇須
多伎比賣命神社稲淵村にあり此四神をいふ又飛鳥社司の
説に事代主命建御名方命高照姫命下照姫命四座也
と高照姫命ハ古事紀によれバ高比賣命とかいて下照姫と同
神なるべけれバいかゞにや侍る延經説にハ太玉命ハ高皇の子賀
屋鳴ハ大巳貴の子なれバ高皇大巳貴なるも明けし姓氏録
に飛鳥天事代主命之後也舊事紀高市社にます甘南
備飛鳥社といへるに据れバ事代主もまた疑なし○安宿とよめるも
飛音也○古今集に家ともかくあるも伊勢
あすか川渕にもあらぬ我宿も瀬にかはりゆくものにぞありける
此哥を始の中務に伊勢か訓へていふ哥のさまをかへてよみて此哥は
と続くとぞよぞ○飛鳥井ハ山城国愛宕郡也といふハ梁塵愚案抄

に東京二條萬里小路飛鳥井の亭の趾といへり大和飛鳥の社
の名君の御心にいひ侍るは何れも二所なかりき乃名の知られ
森乃中にあるを真跡とす○近飛鳥遠飛鳥といふ名古事記
にいへる斬其隼人之頭乃明日上幸故号其地謂近飛鳥也といへ
るハ大坂山口のあたりて此大坂ハ河内国古市郡也峯と堺ふて西ハ
葛下郡也河内にて安宿郡飛鳥戸神社ますまた上到于倭詔
云今日留此間為祓禊而明日参出将拝神宮故号其地謂遠飛
鳥也といへるハ上到于倭とあるにて大倭国高市郡飛鳥神社の地也
上文に坐于難波宮之時とあるとみえて是を近ハ難波にての方
りて又明日を近とし明後日を遠とするとそ苗そろへし
あるいせう
祇園會の川山にいへり先ハ筒井浄明一来法師の
法橋の我の作なれハ平家物語にかしこいはある何とひ謬てちゞし
といへり
あきを志らぬよ　雪山に寒苦鳥ありて其鳴音今日不知死

明日不知死何故造巣安穏無常身とのたまふ涅槃経にみえたり
後拾遺集に
さてもけにおもひしらぬ世の契こそたのむにつけて哀しかりけれ
○あぜ　畔をよめり間塞の義なりや古語におとしいふ堞也ともあり
○機との糸にいふも同義也万葉集にあぜ操とよみしはかぜといふ語の約也○あぜくすといふ語は機とのよりし古語あぜをかへす
あせも　倭名抄に熱沸瘡をあせもと訓せり汗疹の義也
あせゑ　彩撰六帖にみえたりあせゑ又なしびともみえ西万葉集乃ならず碎非是也ともいへり今のいはにえせび也四方にていはせびといひ豫州浮穴郡にあせび谷あり西州にてはよしみともいへとぞ見えせびは毒ありされはむかしの辞とのもきこて又万葉集によめる牛馬も食のにしたる牛木にはまる葺なれは必殺も人と殺もするハ新しくみえたるなり○太神宮の祢宜荒木田氏ハ歳首に是を飾る繁栄を祝するなり

あぜち　按察使の音略也元正天皇の御宇に始まり其後鎮守府将軍以下必置り天平宝字九年に多太麿鎮守将軍をり仁明兼和十年始陸奥国置鎮守府是置府之始也○院中の女房の号にもなれり
あせみぞ　倭名抄に汗溝とよめり馬にいふ也
あせこき　汗濃也曽丹集に
うしとおもふ心もしみて汗にしみぬれてかなしやとやむ心もさへん
あせまり　眼の名にいふ汗とれのたまりきたるそ汗尿也○義文に花柳巻なとあれはあせとりに茉莉と書するえたり
あせりぞく　延喜式に阿世利盤七口とみえたり浅盤なるべし
あせんやく　阿煎薬といひけり百薬煎をいふなり五倍子をもて製するといふより名付くと佳えれ
○あぞい　万葉集にみえたるあそし也今のまくしといふがごとし

あぞめ　備中ノ国吉備津彦神社にありて奉仕を阿曽村より出る巫女也参詣の人備供料とさゝげ釜のまへにさゝとなけハ其釜鳴る音高し是火をたくの役を勤むる也

あざむ　新撰字鏡に怏をよめり平家物語に一門にあざまもてとかへるありあざむハ恨なる事也まさに欺也むねに恨ミあざむ

かゝまつるなし

あくが　當字中字なとにあり合足の義なりや又方字をよむてし日本紀によんでうり○時にあくびハ當字あくにあくびハ中字大にかくびも風にあくびも同し憂にあくるまでとよむ當也と注せり

あたご　愛宕とよめり神名式に丹波国桑田郡阿多古神社とも火産霊(ホムスヒ)を祭るといへり又ハ冊子焼まかで神去たまひしゆゑ仇子の義なるにや麗気記にハ瓊々杵尊とせり一説に本宮伊弉冉尊若宮火産霊神とし登壇必究にも日本愛宕山といへり今ハ山城に属せり一説に神社もと洛北鷹峯の東に在しを光

仁帝の元年に慶俊今の地に移して愛宕護山と号すといふ

あだち　安達ハ陸奥の郡名也○安達藤九郎盛長ハ藤原山蔭の後也○足立とあり同時に足立遠元あり

あたり　其辺の事をあたりといへりて万葉集に辺字當字を用ひ今も當所あたりといふ庭訓に撥(ハラフ)當とみえ又あたりの事をもよみ日本紀に路とよめり

あだけ　あだけと訓ずし源氏よりあだけすぎたる人をいへる今もあだけ者といふハ飽猛きをいへるにや○舟にあだけ丸といふハ安宅丸とかけり仇気の義やあだけの大船をもいへり読みづくりのかしいひ伝へり伊勢道一色のかたにあだけといひ又あだけといへる船あり薩摩にてはたらていといひ肥前に後より来るといふ○安宅川ハ義仲の平軍と相戦ひし所也安宅関ハ加賀にあり文治中頼朝公の命也其近邑の松任(タフ)に義経三萬騎にて籠りたる所ありといへり

あたま　倭名抄に顱會とよめり天玉の義玉ハ円形をいふ成
へし俗にいふやどりの名也
あだだか　倭名抄に英を訓せり栄而不実なるを注せりまた
謊花也とも見えたり
あたばら　痃といふ牛祭文にみえて腹傾病なりといへり今俗下風
なといへり
あだかたき　日本紀に逆賊とよめり敵とかくの義也
あたゝか　温暖をいふ新撰字鏡に燸をあたゝけしとよめり
日本紀に熅をあたゝむとよめるも同してら反たかれハ天照(アメテラ)この義成へし
○嫗をあたゝむるとよむハ樂記鄭注に體曰嫗とみえて自己の
体のあたゝまりて人の体をあたゝむる也
あたはず　不能とよめりはひたつぞの義なりあたはずといふ
ちめし神代紀の訓にあたはぬとよめり
あだゆきひ　万葉集に見ゆ　仇(アタユ)まひの義也といへり

あださくら　むのちる迷きをいふ成し古今に
あきもとく世はいひ心ハあださくら散の花は風ハふらぬ成の物そ
○萬葉集にハあだなる草とみえて採なりといへり
あだしびと　あだ人も同し越人とよめる他国の人をいふ義成
也よそなるあだなりぬをきよべり
あざむく　書字伊勢物語に化鏡とあり互に人をあざむく也
とのたまはりしを云へり
○あぢ　續日本紀新撰字鏡倭名抄に鯵と訓せり義解
に味しまり味の佳なるを称せる義成へし○尼倭にしれあぢなり楓
葉魚也又箆あぢを播州室津などにて又将あぢありいはせ魚と
もいふ○俗語にあぢもをやしやりもなしといふハ味より轉して阿
字にしも舎利をなしといふ也また言宗に阿字を網して鑄て観する砂ハ
土砂也といへり
あちめ　神楽に阿知女の作法あり鈿女の遊行也といへり

あぢはひ　万葉集に味飯とよめり味飯を水に醸なしてみ
○酒食を持也
あぢつく　詩に宜とよめり味着の義なりや
あぢさゐ　新撰字鏡に○万葉集に味狭藍とかけり味ハ
あつむる狭藍ハ色をいふ也倭名抄にハ紫陽花あづさゐとみえ
白氏文集を引て南部新書に招賢寺僧植桂香紫可愛郡守
白公名曰紫陽花とみえたり○今にもひらのもあとよめるハその四
数にさくばいふ也○唐ぶちさゐなり其樹たち葉すこぶるつきたに似
より尖あぢさゐとも以ふ其の形によるも也六月に咲り○草ぶち
さゐなり秋なさくべきかくて似たりまて草額といふ
あぢまさ　日本紀に檳榔とよめり味勝の義なるべしといふや東国
種なれど日本にも伝へて食ふ如七东坡が詩に紅潮発頰酔檳
榔とよめり蕃名ひいなんぞ○薩摩に檳榔弱ありびらう多し
びらうハ蒲葵也古事記によりてあぢまさの訓ハ自凝島とあるべきあ

きハ淡路の辺に在べし垂仁紀に檳榔之長穂宮とある出雲の地
なるべしといふ薩摩の辺にいふハ一統志に朝鮮全州海中有檳榔嶋と
云是なるにや又蒲葵を古記に皆檳榔と云せり琉球薩摩の
産なれハ然名ありしにや檳榔ハ葉勁健にして弱き蒲葵ハ軟弱
にして連もり共にむべるの如し
あちこち　彼此をよめにおいつあちらこちらともいへり薩
州にそなんがいこんがいといひ琉球にハなまんらいこまんらいといふ
あふりてはにあいまをあちこちと舟人こびしてさはさりし
十魚の名とよみ入たり
あぢまん　新撰字鏡に嘌をよめり無節度也と注せるは今
俗がちまんといふ是なりや又かちまんハ称智慢の義にや
あぢさをふ　万葉集にみえ味多経の義味ハ味鳬をいへり多く
めとつづけよめるハむれ居る也むれをる乃義也といへり
○あつけ　俗に暑気をいふ○韓人ハ酒をいへり

あづみ　古事記神代紀とのに阿曇とあり音也されと
あつみなれハ海に同し○蝦夷にて海をあつひといへり

あづかり　諸院に預あり職掌の名也古へよりいへる事なるへし
又小預あり○ある郷にて預と音よりよめり

あつもの　新撰字鏡に羹とよめり熱物の義也今いふ汁
也といへり源氏にもわかめのあつものといへり臛も同し魚肉の
あつもの也○禁裡にてもちにあつ物といふハ豆腐を水煮にして
みそ汁かけたる也

あつはひ　新撰字鏡に煨とよめりれきびとも訓せり熥に
同し熱灰也と注せり

あつごえ　厚肥の義源氏紫式部日記などに紙衣あつごえといへり

あづまぎぬ　源氏にみゆ東絹也後世伊達縮の類成へし延喜式に
東絶とみゆ

あづま路乃と　万葉集にみゆ路とことをもよめり

あつかぐれ　日本紀に失火とよめり熱く流るゝ義成へし
一説に古事記にミをアに作る水流の義焼亡を忌る詞也ともいへり

あつまあそび　東遊とかけり駿河舞求子なとも其也とぞ東
のゝまくいひし東舞も同し石清水臨時祭宣命に東遊走馬乎
調倫氏とみゆ又東舞祝章朝野群載にみえたり

あづまからげ　新古帖にあつまからげの麻衣とよめり裾を
からげあげたる体也

あつましめらふ　熱き汗にてしめらかいへり夫木集に
秋くれと風ひやゝかなる袖もからさやあつましめらふむつかしきよや

あづかひのつみ　神功皇后紀にみえたり穢惡をいふ成へし

あつかりまうす　関白とかける也関白ハ宇多帝の時太政大臣
基経公より始れり愚管抄神皇正統記にみえたり○夜乃関白
と称せしハ権中納言顕隆也法皇に親任せられ政事に入て仰ると
りて也年中行事の分に

みこもりのそてにひろけて山なるのあつかりもりするをかしこそ
そてひろけてハ覆奏也

○あてなる 妍字をよめりあてやかの意也細流に日本紀を引るそ
ひかこと

あてがひ 禄物下行などをいへり充養の義なるべし壒嚢抄に
率とよみ法令の率(リツ)分所といへハあてがひわらの義也といへり

あてくさ 鷹詞に鳥の落たる所の草をいふなり

あてこと 俗に風俗の意味にいふ詞也あてことばといへり又讖
謎のこともいへり

あてぶみ 朝野群載に民部省位田充文とみえたり年中行
事秘抄にも石清水臨時祭にみえたり

○あとめ 足跡の義めハ助詞なるべし人に跟従するを某に云ふ
まで踪迹に付て来るといへり今の人の後につく所謂後に路間などいふ
なり

あとび 狭筆紙に門火のさまいひかけたるハ梓弓引の詞なれバか
く呼ひしにや

あとり 日本紀に臘子鳥と訓せり天武七年に蔽天とみえたり
後世も此事ありし倭名鈔にハ本朝国史用猶子鳥此鳥群飛如列
卒之満山林故名とみえたり古事記に足取に作れり万葉集にも
見えたり俗にあつとりともいふ新撰字鏡に臘觜鳥ともいふ棄鳥
一名臘嘴雀とみえたるに拠て音を借りたるなるべし○あつとりの火
まくりといふ諺ハ其性躁しきものにて漁者の網をうちかけて焼
におびへて火に入て身を亡す事なり○子を朝鮮語におとりと
いふ跡見をよみに近し

あとえ 安勅とよめり姓氏録に出て今の氏にも見えたり又
きんちうくの約音也ちよ反こ也

あとこえ 跨をよめり日本紀にわとこひとえてあとこひとよ
みえたり新撰字鏡に踏跨をあとこむとよみ齊足而踊ぞ

貌と注せりさればまさかりしよきりて又あつとこひともいふ
あとしき　東鑑に跡敷とかけり後職(アトシキ)の義なるべし
あとさきどり　儀行といふ是也或ハ人ノを譯せり又行を倒に行ともかけり○あとみざりハ辟易也
あとかた　万葉集に跡状をたつぎとよめり是其の借字也形迹ともいへり
あとみなみ　万葉集に跡位波と書り跡位ハ敷坐と云字のことなれハしきなみと訓べしといへり
あとたれ　今よめるは釈の法坐すしまの義也維摩經序に非本無以垂跡非跡無以顯本とかけり我邦の中頃より本地垂跡の辯論を立て神佛一体水波の別なしといへるは此語によれるといへり本地ハ根本地の義也
あとのつき　前月をいふ跡の月の義也
あとをわすれし　足迹も墳墓もなかれを喩ふるなるべし伊勢物

語に
中香に立居る雲乃跡に我くしてのもなくなりにけりと
玉葉集に
楫をたく大海の原にゆく船乃跡なきもなかれ世をいかにせん
○あなぢ　西北風をいふ西土にいふ不周風也ちハ風の訓なりこちのちに同しといへり一説に此風吹ハ為なし水氣すぞと吹掃ふとすてあなしともいふといへるハいかが○畿内及中国の船人の詞に西北の風をあをぜといふハあなじ乃轉語也後拾遺集に
あなぢ吹瀬戸乃志ほ合に船出してはやくすぎさるさやかたの浦
○和泉和泉郡痛脚(アナシ)村ハ霊異記に見えたる穴師ハ神名式に見えたる大和城上郡也○大倭本紀に御食津神今巻向穴師神社にます四所神鏡大和国穴師御食津鏡とある是也穴師に坐兵主神社あり穴師大兵主神社あり昔穴師村の東弓目嵩にありて今遷て穴師社の左にあり和泉和泉郡泉穴師神社二座宮村にあり

宍師凡神級長津彦命級長津姫命を祭といへ

あかふ　宍生とあり石切のうた也といへり

あかや　所の名に宍太といふありこれを反かや也丹波にそうと呼
ひ伊勢にそのゝと呼ても吉野郡の宍太かをかけよと呼ぶ也又玉ふ木のほ
ぶの名と伝ふ○摂津河邉郡の宍太ハ今白井天王の祠あり

あかさ　彼方とよみてあのかたの也ぬの反かせ

あかめ　遊仙窟に亘耐とあり小町集

秋風の吹につけてもあなめあなめ小野とはいはし薄生けり
さうなるは江次第といふ書にいへる故事なり此を委くのべたりされど亘耐
の説也列子の従者見百歳髑髏攓（スイテ）蓬而指云くの條及述異説に
みえたる陳留周氏か婢にあたりての造たる事なりとし又時代も合ぬに
○揺氏総州古河に仕官の時たけお屋敷とて住ぬ家ありしを
そのとしある時賜りたり移徙の夜夢に二十餘なる艶女の短冊
をもちてきたり我はここの主なる人なり心を介へよとて久しく

住事とはいかゞ御身もあはしく心得たまへる為ありつらんおとことて
其跡へあてり甚短冊に
哀これあなめとはいはぬ糸薄とそあり
明日家の傍八隅て東南の隅に古井の有るなる甚側に薄茂
りたる所ありそれを鋤とりて堀るに土中より七八
寸ばかりに白頭一枚あり薄にて目抜ふさぎて出たりしなるを我
小野といひし人の古ことを書しはのあとありとおもふに不思儀を
みつけたりと布をもて包み栗の木にて箱をつくらせ白き絹
のきれにかやうにん書て入たるか蓋を釘付にし冨士山といへる所に
葬て一株の塚の神とし弔たる甚碑銘ハ宇都宮の光禅寺
の関林書たり

あかう　古今集物名にあり痛（アナウ）憂きの義也といへり嗟嘆
の内に悲傷の意ある宗尊親王の哥に
　　恵とのみ用ゐられしもむかしにて今ハ嵐のあなう世の中

あなゝは　おほよそにあなかしこきの略
沈於へし
あなにく　遊仙窟に生憎又可憎をよめりあやにくともいへ
つまあなにくも同じ
あなもそき　神名式大和国添上郡穴次神社と見ゆ横井村にあ
り高皇産霊尊を祭るといへり今は青榊辛榊伊栗穴栗の四社
とし一本に穴吹神社に作る奥義抄にふるやきの社といへる是なる
にや穴次と穴栗と同じ伊栗とおなじくも神護景雲中に春日の
社鎮坐の時より殖栗のちゝりして中臣時風同秀行二人に中臣殖栗
乃姓を賜りしによりなりし伊栗は天太玉命を祭り青榊辛榊
は日月二神也とその社傳也万葉集に妹か家に伊栗の森乃藤のな
こよめるにも此社のことなるにや
あなぐら　圓きを竇とし方なるを窖とよむ也○旗本に民
部なる人竇を堀きり内に入て覗く民部はなかくらの文字ある

とりて火を燃し乗て現るゝに現然とかりて又其土を穿つにい
つくまでも字徹まつりとこそや
あないち　兒戯にいへり穴一の義なるべし帝城景物略にいへ卯
兒の戯也
あなびら　新撰字鏡倭名抄に跗をよめり足枚の義也倭名に
足のひら又足の甲といへり趺も同じ
あなうら　倭名抄に蹠をよめり足裡の義也栄花物語に蓮臺
にあなうらをむすびてあり又新撰字鏡には直にあしのうらと
よめり又趾蹱をもよめり○神代紀に足占とよめり万葉集にも
見えたり占は定まりたるをいふ其体を詳へいへり桂中納言定
頼卿
往ゆくはきらはかしきは行方にとこそ定むらん足占からも山
あなおと　新撰字鏡に跳をよめり又なひじともよめり足音の義也
あなはとり　應神紀に穴織をよめりあなあや通也雄略紀に

ハ漢織とみえたり
あなそかくつまれかろんあなハとりあなかやうくのあるらんや
あなたふし 催馬楽のうたひ物の名也安名尊とみえたり
あなみにく 日本紀に大醜万葉集に痛醜とよめり
あなとゝし 新撰字鏡に可咲とよめり見醜貌と注せり
あなさやけ あなハ嘆辞の辞さやけハ潔けき也釈阿賀我百首に
あなさやけいなかりしろとみゆる紗とる柿葉に霜のおくかと
古語拾遺に阿那佐夜憩竹葉聲也阿那於茂志呂言衆面明白とみえたり
○あなやう 阿娘の呉音也伊勢の俗あんにやといへるもたかやうれ訛なり又娼妓をもあんにやといへり龍図公案に土娼只呼娘子といへるもをかし
あによめ 嫂とよめり兄の婦也
○あねハのまつ 伊勢物語に見ゆ奥州栗原郡の松の名也といへり

和名鈔栗原郡に栗原ノ名ありいまはあねハ村もあり盛衰記に奥州あねはのいふを白なみにいく數とみえたり栗原郡本是伊治城也と續日本紀に見ゆ
あのくたら 傳教大師中堂建立の時乃哥
阿耨多羅三藐三菩提の佛たち吾たつ杣に冥加あらせたまへ
阿耨多羅三藐三菩提ハ大日経に見ゆ唐三蔵の翻に阿ハ無耨多羅ハ上三ハ正藐ハ等三ハ正菩提ハ覚とみえたり
あど 猟師の語に網にかゝる所をいへりかぶちあるくといへハ網のいとし也そそ小児の人に別るゝ時あどいとしといへり網にある所あんどといへるもあり網歯にや○蝦夷に戸障子をあどといへり
あたご 栗田宮ハ愛宕郡にあり崇徳帝の廟也元暦元年にあらためらるゝ也
あはし 淡とよめりいとあかりもよめり味の薄き也源氏に牢の実取らぬさにあはしといへり○淡しきハ五味の本也

あはひ　交際をいふ相合の義なるべし

あはふ　神代紀に粟田をよめりふは生の義也

あはせ　拾芥抄にあはせをさかなひそろへてうつわ物に錯よし
ものにあはせてくふ由飯に對していふ世にさいしと稱する是也とぞ
されば配の字なとも義なるべし

あはび　倭名鈔に鰒をよめり上総にこのひつけと云貝あるべしえぞにおひどといふ甚肉あつくしろくて乾ての用多けれはなお名とすべし本草を引て鮑ともかけれど鮑は漬魚なれはいふもじなきもいつもあはび指すにや訓蒙字彙に鰒を石決明とぞ寒と鮑魚といふにあれは朝鮮の方言なるべし○江戸にあづまにくろ鮑をすいかんとよめり鰒のつくりを西国に角といふこは腸のさきさきの謂人議見にいふこと含んて吐出せはよくなし二分まて貝あるとぞ○あはひの貝ふたつなきゆゑ片思ひといふ万葉集によめりよて婚姻の食禮に用ひずといへりされど催馬楽におほみさまませむこそせんみさ

くるまなれはけんあはひさきなるかせよろんともみえたり○延喜式に御取鰒着耳鰒放耳鰒腐耳鰒耽羅鰒鳥子鰒都々伎鰒細割鰒長鰒短鰒丸鰒串鰒横串鰒嶋鰒東鰒雑鰒鮨鰒纒鰒葛貫鰒火焼鰒羽割鰒蔭鰒薄鰒鞭鰒汁漬味漬腸漬蒸鰒玉貫醤鰒鮨甘鮨夏鰒なとしての数品多し今は串貝丸乾の二種を多しとれ○野據にうち鰒はのし鰒也といへり朝鮮人引鰒とあり○耽羅鰒は肥後の貢のよし或はつくるあり耽羅は国の名朝鮮の属なるなれどもとそ也嘗て同く對る州に大鰒の殻をもとめて手水鉢とし水一斗を入へしと○蚫味噌類聚雑要に見えたり○ながくえひきと象る器にあはびかひをはぐり貝なとと云國語の注に脤宜社之肉盛以蜃器今松江故家得祭器於土中皆蠣殻也とみえたり

あはゝ　小児に教へてはといひすしはせるに口をたゝきてかくいへは嘍啝是習語之声とも小児相應也とも梵書にみえたり

あばく　發をよめり發屋發家なとみえたり○論語に訐をよめり

倭訓栞 中編巻之二

攻人之陰私と注せり
あばけ　俗語也堤などの浩水に損毀せらるゝをいへりあばくれ也
諺之
あはひ　粟飯也又脱粟飯といへるを黒米飯といへり○太平記に
粟飯原の氏あり
あばける　あばくせける反くし也許字發字などをよめり又
遊仙窟に荒涼とあばけとよめり今池塘などの潰崩るゝにあ
ばけといふ是也
あはつけし　源氏にみえ又あはつかなるもおなじ淡々敷の義也
といへり
あはよくば　俗語也あはひよくばの義なるべし
あはめる　諺也輕しめらるゝことをいへり淡しき義といへるごとく
同じかるべし源氏にもあはめおくみどつかへり或ハ阻とよめり
あはせ乃きぬ　倭名抄に袷とよめり新撰字鏡にハ裌とあハ

せのころもと訓し全浙兵制に夾襖とあるせのことく　譯をもおもに秋
あはせとよむハ九月一日より八日までハ袷ときるゆゑ也　女官餝抄に
四月中ハあはせのきぬにて候ふとあり
あはびむすび　鰒の形に結ふ也日かけのかづら檜扇などにもいへり
あはぢむすび　おなじくあはびに結ふと同じきにや或ハ
淡路結とあるか二つならべたる形也
○あはひ　間とよめり九ケ國と云ふ處の義成へし神代紀に際
もよめり霊異記に暫頃もよめり
あひら　日本紀に吾平とあるを倭名抄に始羅とあり大隅
の郡名也始ハあひれ音なる縁ありてあひと轉しるせなりきと字
あひし　木子に哈刺基とあることし
あひば　饗庭とあり姓にいへり也拾風抄に伊勢員弁(ヰナベ)郡饗
庭御厨あり今相場村といふ○通俗に相場といふハ米穀の直ひ
にいへり

あびき　網引の義也○難波によめるハ万葉集より出たる也古今
　集に　なごの名も我名もたてし難波なるみつとも見えぬあびきすなはし
あひそ　産後血暈に用る古方の倭名也あるハ奥がら鮭
　の紙用なり
あひぐ　合火の義同火也同じく炊爨する火を合せる也
あひゐ　詩經の盍簪とよめり聚首貌と注せり
あひづ　西土にいふ号也相図とかけりすべて口結にづといふ
　も是也あひづのやハ号箭とみえたり○會津ハ地名奥州也
あひくち　倭名抄に齗唇を訓せり間口の義口張歯見也と
　注せり○短刀の名にいふハ合口の義鐔なきものをいへり八合にいへ鯉口
　の称といふともいへり○人嗆ひするも合口なりといふハ氣合の事也
あひかた　右の肩なり人ちがひなるをいふ
　旅途の駕輿丁のいふハ對人也恐らくは左

あひやけ　婚姻をいふ妻父曰婚婿父曰姻といへり東鑑に
　相舅とかけり親家ともいへりやけハ宅の義なりや○あひむこハ婭也
　両婿也と注せり連襟ともいへり○あひよめハ妯娌也両婦也と
　注せり共に倭名抄に見えたり
あひもの　間物なるべし太平記にあひものとて乾たる魚の入たる
　俵を船に取積てとあり今も京にて何に雑々の干魚などを
　あひものとぞ海人藻芥に近代間物五度入十度入塞臭とあり
　よりて今いふ酒のさかななるべし
あひにあひ　此と彼とおかしかあひ合たるをいふ法華経の諸佛興出
　世懸遠値遇難といへるにいへりといふハ非也
あひさまに　万葉集にあまたあり相驚くの義
あひそめがハ　筑前太宰府にあり○信濃筑摩郡林村廣
　澤寺に三輪社ありて僅の溝川をいへり俗に云傳たる阿曇郡河
　合村社の地埴科郡玉依姫の神社乃也とのりに據かし云為なり

あふちの花ちるあひその門のをしふこそまくせむまとひ乃袖ハきしきもせ
あひむまびえかつか　新撰字鏡に期とよめり相結計乃義也
○あぶ　倭名抄に虻を訓せり万葉集に蜂音とかけるあハ
虻のなく声をとりて名とせるなるへし是蜚蝱也木蝱ハ血を噉ハすも
とよめりさと美濃路にてハひの木あぶといふ又めくらあぶなりともいへ
たの私のむよりて色黄也
あつぎ　土をあつむる器也といへりなんだに同し篩字をよめ
るは字書に考得ずて盛裹記にみえ尓雅に輿革後謂之第車
後戸名也といへり正韻に音拂とあるに据ゑへし
あふち　倭名抄に楝をよめり万葉集に相市ともかけり
今俗せんだんといふハ焼て香氣あることをもて和の赤栴檀と
勅名を賜ハりけしといふを華厳経に栴檀一銖を焼ハ小千世
界に薫ずといふ諺に栴檀ハ二葉より香ハしといへるも是也枕
草紙にあふちの花いと紫に咲て必五月五日にあふも

をかしくこそ有り名義も是ならへしさて又ちも花がちにあふちの実
韻會に今人作粽并戴楝葉五色絲皆汨羅遺俗といへり
今も田舎にハ端午にあふちをさしもすといへり歳時記に凡一年中花
信風二十四番始于梅花終于楝花といへり○楝の花ぞてふ落
花まるも色也といへり○藤原明衡の詩に樗花菖葉自回辰と
見へて万葉集にも樗をよめるハあふちなりといへり此字を本
草に五月五日俗人取樗葉佩之避悪氣といふにもよれり槵と
よむハ樗と悪木なりと注せられたれ倭字也新撰字鏡に槵
もあり松岡翁の説に楝と苦楝とハ別也苦楝ハ近年和州より
出るといふそ今黄楝樹といふなりや○土右記に俘囚貞任重任
經清等ゝ首各挿鉾植至西獄樗樹梟之といへり悪木の
義ともなるへし磔と槐にもよるも悪木の義とこれなるや○壒嚢抄
に涅槃経に維婆樹といふハあふち乃木也毛虫と維婆虫といふ
苦楝とてかぐれと楽むとのしく五欲に荒せる味たとへとそへ

いなり○いなちの関ハ信州伊奈郡にいなり阿智の特せる成へし今
村中関向関関の的場名の名をしまり

あふつ 扇き搏つの訓成るへし播字をよめり荘子に播(ハ)
糠(ヌカ)眯(ヒ)目ともいへり又あふつといふハ簸揚の義也○栩(アフ)ほハ古事記
に名の起つらえて栗林なるへし逢坂ハ日本紀にみえたり倶に
滋賀郡也

あふほ 万葉集に炎をよめり或ハ焙又煏をもよみ又炙(セキ)を
よめり炙ハ炙也音セキ倭名抄にハあふりものとよみさる音也や
新撰字鏡に炙燎をもよめり

あふせ 合瀬也恋によめるハ川瀬によせたる也

あふくま 古今みちのく哥によめり不れ名を逢隈によせて
また神名帳亘理郡に安福麻河(カ)伯(ハク)神社とみえ三代実録に勲十
等阿福麻水(カハ)神とみえたり源順集にかしまなるあふくま川と
よめるハ神名帳に此郡四座とありて安福麻神社の外三座とあれ

皆鹿嶋何〳〵の神とあれハ此の名ももよせる成へし

あふりやうし 押領とかけり西宮記東鑑に押領使みえたり代叙
郡と押領して朝に服事せる者の称也されと天慶に陸奥押領
大掾藤原秀郷押領使藤原秀郷より三押領使と
いふハ奥州秀衡伊豆祐親肥後菊池也天暦の比下総守藤有行
請補押領使とみえ寛弘の時に以高安為正為淡路国押領使
とみえたるハ国司の外専追捕を司まり一国の政務ハ国司の主る
ところし兵馬のみハ国司へかゝるに及ハすそ押領使の任たりしそ小
山抄にも諸国中置押領使事とみゆ日本紀遣唐の押使の如し
天暦の時罷追捕押領等使と朝野群載にみえてるうたり公
役にして出し軍兵を召もて出る所のすくにて奥羽軍記に陣頭
にもたるところされハ字のかし押領しとふるまて八使といふへから
なるを○疱瘡の後に出る瘡を俗にあきろしといひ関東にてハ
あふりやうしといふ押領使の義なりと梅村哉平にいへる也

東鑑に見えたり義浩にて長吏といへり
あぶらひ　万葉集にみえたり油火の義なりといへり○あぶらひ大明
神は近江甲賀郡也油火か嶽あり
あぶらつき　倭名抄に燈盞とよめり今あぶらざらとも
油碟ともかけり又鐙とよめりつきハ坏の義に同し○あぶらつ
ぎハ注也
あぶらつの　倭名抄に輠をよめり車脂角也と注せり
あぶらむし　滑虫也といへり大小二種ありあぶらむしの法と
いふ伝法ありて除き逃きさといふ也○埃嚢抄に萩の枝に
つく油虫といふ穴別の虫也今あぶらむしといへり○根あぶらむしハ
菜の根につく油虫に似たり
あぶりほし　万葉集にみえ炙干とせり
あぶりきぬ　類聚雑要に重硯莒敷物料油絹一帖とみえたり
あぶらしり　倭名抄に髀をよめり脂尻の義也

あふりいた　障泥板康富記に見えたり伊勢神宮の事にいへ
るもの也○御鎮座本縁に編懸障泥形屋といへるもみえたり
あふぎながし　扇合といふ扇面に樂府の数句を書て楷草
相半かし後一条帝に歎賞せられしハ藤原行成卿也○禁裡學
問所の繪ハ源氏の扇流也ともいへり
あふみがき　袋草子に
あふてならひ以乃かひハなかれけるもなれてまたなかりけり
後拾遺集に感歎していふらく人ハみつからかそに書かれたる字油螢の上
に鼻ながらは川下也となり又
浅ちふの秋の夕くれ何もしハ秋ごとに書きたるおもやうかしき
○浅茅生にとむる手ならふの字ちらぬの字気とつかへり
あつひどりたゑ　頼義の嫡男義家を石清水の修寺に八幡
太郎と称し神紋鞆絵をもて旗の紋とすまた次男義綱ハ賀
茂社の烏帽子子に准らへ加茂次郎と称し一ツ葵をもて旗の紋と

あるまじ義家の末裔にして徳川家伝来なりて親氏公三州加
茂郡入部の後威勢ゐさんに御子なまし生をたまふによりて郡名
をとりて加茂朝臣と称し鞆繪の紋を葵に改めたまへりとぞ
よて葵鞆絵といへり

○あへぎ　倭名抄に喘をよめり口氣引息と注せりあへぎは
息つぎハ引の義なるべしなへてハ用にいふ也一説に熱歴求の義也と
いへり○土佐の人ハ離をまう柴木をあへ木といへり

あへろ　源氏にあへろ弱きさま也といへり淡きし弱と通へり

あへとの　なへハあちなせ也なせ反へ也なりにとのにあへとのと
よめるハ饗食物の義也○新撰字鏡和名抄に齏をよめり是も
又同義なるべし擣姜蒜以醋和之とみえたり万葉集に醤酢に蒜
搗雑て鯛ねかふとよめるも是也今いふあへものと同じかるべしと
いへり○今いふあへものハ塩嚢抄に酤字をよみ酤以春梅といへり和
字を用ゐるもなりとみえたり○後撰集にいそれあへうるたゞみ義

らんとよめるハ齏に塩梅をかねたり

あへしほ　醤をよめり饗塩の義也

あへつくり　倭名抄に膾をよめり合せ作の義なるべし切肉
合糅也とみえたり

あへたちばな　倭名抄に橙をよめり万葉集にもよめり又
む橘にあへも世にまれなる齏橘の義唐人の好むも青魚雪落
膾橙齏とみえたり又金齏玉膾なりといへるも是なりといへり

あへまろばしも　万葉集によめり和纏まぜもの義也とぞ

○あほ　伏見稲荷の近所に安保町あり○前漢宣紀に
丙吉有阿保功注に阿倚保養也とみえたり

○あまご　伊勢國菰野に産す鮎に似たる魚也毎年六月十
六日御贄川に徊して大神宮に献るといへりなめども同物也万葉
集に海子とかけるハ漁夫をいへり尼をあまごといふハ御字なるべし○
雲州の尼子ハ塩冶判官の後胤也祖先孤なりしを祖母の尼公養

育せしより称となれり尼子浦ハ阿波国也義経の着船せし所也
あまく
餘戸とかゝり諸国の名に多し令義解に不満十家者隷入大村不須別置とみえたり
あまき
倭名抄に甘蔗を訓せり甘木の義なるへし今冨士山によりて南京の種に因し一種茎長く毛あるものハ福州の種也又紅毛甘蔗あり西土の産より大也○劉氏鴻書に日本に諸薬あり多甘中印しとあるハいかゝ延喜式にも陸奥出羽常陸より貢せりおゝくみえたり○肥後飽田郡に味木(アマキ)庄あり倭蔗の産出也
あまぢ
万葉集によみ天路の義也
あまみ
齊明紀に海見嶋又天武紀に阿麻弥に作る元明紀南嶋奄美とみゆるも是也
あまぜ
雨戸の義関東の家造りにハ多く雨戸あれハ也よて大権現上洛の時にこれを西しこれを宜く青に塗きらうすめられたり
あま乃と
漢礼楽志に天門開とみえたり

あまぐし
類聚雑要に尼櫛是昔尼所指之櫛名也とみえたり
あまちごと
日本紀に海濱をよめりあまちを海と訓通す
あまさむ
古事記の訓にみえたり天飛の義かるの詞とあまにつけよめり軽を鷹にかけよりしよめる也
あまのこ
遊女に多くよめり蜑の子也
あまうり
江次第に甘瓜とみえたり甜瓜也
あまぐり
江次第に甘栗とみえたり拾芥抄に大饗のあまぐりの使とみえたり
あまのり
倭名抄に紫菜とみえたり俗用甘苔といへるハ上品といへり也東鑑に甘海苔に作る浅草ハ武州葛西ハ総州也
あまりこ
伯耆会見郡弓浜に餘子(ゴマイコ)明神ましませり大社城下米子(ヨナコ)に近し
あまおし
栂にいへりあまぞめきて乾ける也鳥栂也といへり
あまどり
新撰字鏡に鶏を訓せり鶏ハ突厥雀也あるなる

といふも是也　漢書に天将雨則鸛必知之とみえたるこれ也倭名鈔に胡燕を訓せり西宮の説なるへし東海の地方にて鳥をもといふ也ゐなんとてハ此鳥を中にかけり飛て鳴といへり太平記にあまれおほそれ羽つきたる平やなぐひをおひてといへるも是なりやなまつばめともいふ貝原氏鶺鴒を訓せり山つばめともいへり許渾詩に石燕拂雲晴亦雨といふも是なるへし

あまかハ　材木又ハ子実の粗皮の肉に又甘皮といふあり実にいふハ釋也俗にいふあまかハかたくしといふハ是なるへし又あまはぐといふ義同し○安宅の謡にいふハ修験道の雨皮也山に入時の油紙也といへり蜻蛉日記にはまかハはらる車とみえ記録に雨皮張なともあり今いふかつぱ也○蛮国よりあまかハといふハ阿媽港と訳せり呂宋の港の名也中にいへり莱物なとも多しといへり貞享二年に阿媽港の船来て伊勢国度会郡の高貴の漂流せし者を送りきたり

あましゝ　倭名鈔に瘜肉をよめり餘肉の義也みこしゝみと訓せり

あまざけ　漢書師古注に醴ハ甘酒也とみえたり○ふどうざけを盎といふ

あまばり　万葉集にみゆ雨霽ともかけり雨障も同し

あまとこ　新撰字鏡に籭篋筥なとをよめりあまハあみなるとりつや

あまだな　編棚の義なるへし火上の棚をよめりあまだしあまざらしといふも是也

あまねし　周字普字遍字なとをよめり天並しの義なるへし又徧也周天普天なともよめり

あまなへ　日本紀に和字とよめり甘和の義なるへし○続紀に和買とよめり

あまの川　天津河ともあり天も雨も同しことを示せる

いふことつゝの如しつハ助語也
あまつかみ　日本紀に天神とよめり天津神の義つハ助語也
天子の封祭をいふと天神をいふよし令義解にいへり
あまのはら　神代紀に天原とよめり高天原に同じ古事記
にも見え
あまたらし　万葉集に大王の御壽ハとこしなへに天足ぬとよめり
あまつみづ　万葉集に天水とよめり雨をいふ也今音を呼て
あまつかぜ　天の風也又基俊説に宣旨をいふといへり遍昭
の歌によりて也
あまかけり　万葉集によめり祝詞に天翔り翔りつゞけり
あまごもり　万葉集に天隠三笠山とつゞけり
あまのかハ　天河の義也俗にあまがハともいへり○伊勢物語に
よめるハ河内国交野郡にあり○杉木の名をもいへり是にて名く
あまつひれ　万葉集に天領巾とよめり天雲をいふ天領巾隠

とよめり又
秋風に吹たゞよふ白雲ハたなばたつめのあまつひれかも
あまさかり　古事記に天田振也と見ゆ歌の初句にあまとも
とあるをとりて也
あまざかり　万葉集に天さかる鄙とよめり鄙にまかる也
あまづゝみ　万葉集に見えたり雨慎の義こもり居をいへり
あまつゝみ　中臣祓詞に素戔嗚尊天上にておかしたまへる罪を
天津罪と記せり国津罪に対していへる也○継体紀に天罰を訓
せしハ天津罪を假借したるものにして字義異なり
あまつみこ　天子の訓也或ハ天家と称せり
あまのえだ　天皇の連枝のこと親王をまうすといへり漢に
金枝玉葉などいふも同じ也
あましたり　倭名抄に霤をよめり雨垂の義垂をたるといへる
とよむ日本紀にみえたり今あまたれといへり雨下垂の義也あ

まどりもあまもりも同じ屋漏水也よて其處をもいへり
○松前にてはあまどといふなり
あまごろも　左傳注に製衣雨衣也と見え田蓑嶋に屬けたり
日本紀に被雨衣をあまそぎと訓せり倭名抄にハあまぎぬと
みえたり油衣も同じ隋書に見えたり中国四国に雨をおほり肥後に
おとりといへ伊勢におとりつるといふ時雨変ならし為家卿の歌に
みどりも笠きて内へ入る実は袖やしひしける思といへり
袖代の衣手ともあるや也
あまをぶね　延喜小船也あるぐ○をもまた眉公雜字に蜑家
船中に見え○貝の名にてハ形の似たる也○海人の小舟のつなて
かなしもの歌ハ新勅撰に類きし人も古今集に
陸奥ハいづくハあれど塩竈の浦こぐ舟の綱手かなしも
万葉集に河上の湯都槃村よこゝさむさず常よもかもな乃いと須に
てきさきぞ旅の旅路に塩かれの浦といふをうの景を望まて

今かくむかしは飽たらし徒て又も来てみえそやと思はるよなれ
そこの世なれバハ二をひきなりこん事をおもひかへし命あらぬ世
まあれりしさしはいく度も来てみまほしとよくかへしと八雲の
玉てなよしむとあい須乙鵯本云鎌倉右大臣ハ為かけまる奇人と
覺えん哥也
あまつがひ　筑前宗像郡に多し長さ四寸ほどなり
あまがへる　倭名抄に蛙黽とよめりあまハ雨也喜んで鳴なる
るとの也よて雨師ともいへり九州にはあまびきとも又あまひきともいへは
うそあまびきといふ
あまのざけ　下学集に天野酒といへり天野ハ河州の名なり也と
とかり錦部郡よて後村上帝の兵を避たまひし所也文中二年に
後亀山の隆後もあまに也し御所也長慶帝も薙髪の後
おりしまよ在坐せり光明帝も亦然つて
あまのみや　古事記に天の御巣と見え家宅をいふ也○新巣

ハ新室也作家ニ相敬のみをおもしといへる語なれは玉屋といへるも
ゆかり巣ハ栖の義なるへし
あまみつ　祝詞ニ甘水とみえ甘雨といふにおなし詩正義ニ以長物則為甘以害物為苦といへり今の大忌祭乃義解ニ欲令山谷水変成甘水浸潤苗稼得全稔故有此祭とみえたり
あまみしま　齊明紀ニ海見嶋とかし天武紀ニ阿麻弥とし文武紀ニ菴美ニ作る今ノ大島と称も琉球国の内也あまみ人上世神人の名なりその山に降るそこをあまみが嶽といひ又七浦より大隅国永良部嶋ニ至るとあまみをのりよりといへる也古への名なるも と南嶋志にみえたり
あまさへそ　贍とよめり周書の借セる也新撰字鏡ニハ曦をよめり
あまころび　数度とよめり飾ニたびしといへる義成へし
あまびおし　蛇君の獣を捕ニ縄を張て毒矢をしかけるを名とす

夜の所作也
あまのぬほこ　神代紀ニ天瓊矛古事記ニ天沼矛とみえたり
あまのいはや　神代紀ニ天盤窟とみえ又天磐窟戸とみえたり古事記ニ天石屋戸ニ作る祝詞なとも同し倭姫世記ニ据ハ斎屋の義ニて斎殿をいふ也
あまのたけち　神代紀ニ天高市とみえ古事記の訓にやよれはたけちとみえたり八百萬神の集会したまふ所也
あまのみそら　古事記ニ天御虚空とみえ万葉集ニ阿麻能見虚と天三字をよみたり
あまことうた　古事記ニ天語歌とみえ白中ニ高光日御子の段
あまことゝそ名くる成へし
あまのしるし　万葉集ニ久かたの天乃印しと天の川へたてゝおきしとみえたり境界のしるし也又久かたのあまのしるしとそよめる天漢
とよめり

あまのひらで　鎮座傳記に天ノ平手といへりやひらて乃下考へし

あまつやしろ　崇神紀に天社國社とみえ神武紀に天神とも
よめり

○あまつきつね　世に天狗の凡と称するものなり狒皃の凡といへ
非也甲介の説にて石動山の麓石中になり伊勢榊原貝石山
の石中にも出たり○矢根石の又余あるとの説仙蔵にて天狗乃
飯匕といへ

あまてるやま　後鳥羽院御製によまれたり神境廣博記に天照
山神路山は五十鈴の名流山の名也といへり

あまのけふり　唐詩に漢ノ烟光漁浦晩とよまれたり

あまさかる　平家物語にみえたり天逆手より出たる詞なるべし
天逆太刀天逆鉾などいへるも同じ也

あま乃うきはし　神代紀に天浮橋とみえたり越中立山にかゝく名

つくる所なり長五間幅二間ばかり有に
波さしいさる所もなし松もなしこの橋もうつらはえつ

あまのさよかし　天の棧或橋なるへし天河によめり

あま乃はしだて　丹後與謝郡にあり神代口訣に古傳天浮橋現
事相天橋立長二千九百九十丈廣先史三尺名彙抄にアマくくなり日本書紀の
一也といへり夫木集に好忠
よさの海内外の濱にうらさひて浮世をわたるか天乃はし立
○拾遺集に
むかしのよわたる月のまとひ里はけふなくされのなかまのはしたて
是は直に天浮橋と指すなるべし○百錬抄に賀茂上社及海橋立
池となる八条主輔親の第也十訓抄に池中長洲に矮松を植て與謝
浦を摸せしなりと名くといへり

あまのとりふね　神代紀にみえたり天鳩船とよめり速く行舟の謂也

あま乃ねうらは　鴨長明記にみえたり土佐州の天野川也といへり

信州訪方社頭の南を源として流るゝを世に天流川といふはあめ
ながれ川なるべし

あまのいはくら　神代紀に天磐座と書り古事記に天之石位とかけり神武紀には天関とよませたり天関は北辰の一名なるに文
選の注によれるなり高御座也磐は固くしてたのもしき取也

あまのますひと　中臣祓によめり天益人なりかならず生民の義也冊尊の
紋殺千頭とのたまへるは諸々の千五百産屋と立むと宣ふに
ついて天とは天神の生たまへるをいふ也

あまのはごろも　天羽衣也その形によりて又神代の名によりて
八浄湯をいひしせよといへり○拾遺集に
君が代は天の羽衣まれにきてなづともつきぬいはほならなん
意は天女降て磐石をなでてつくさんとする劫数の義なり

あまのやそかげ　日本紀の訓にいへり天の八十蔭の義天日をおほふ
ありしよりていでたく民みそし地これらに属けらる天御蔭日

御蔭の義也

あまのみことのり　古事記に天詔琴とあるは日本琴のことなる
べし神を祭りて託宣を請の琴也そのさまは神功紀に見えたり

あまのいはたて　神武紀に天磐盾とあり磐石の自ら盾をなせ
るといへり出雲風土記にも此名あり

あまのかごゆみ　神代紀に天鹿児弓とあり鹿児を射の弓なるべし
天之麻迦古弓とも見えたり天之波波矢とも見えたり鹿児弓
に対しいへるなるべし○一説にまかごは真木のかごの木なりも弓材とて
いへり

あまのはゞゆみ　神代紀に天梔弓とあり材によりて名づくるなるべし

あまのはゞきり　素盞嗚尊八岐大蛇を斬たまひし剣の名也
古語に大蛇を羽々といひしより名とせし也古語拾遺に見えたり
はゞは疾速をいふなるべし

はるみつるかみ　後世天満天神と祭るかくなれり延長元年後

本宮とし附錄為大富天神とみえ外記日記に一條院永延元年八月五日始行北野聖廟祭禮宣命云掛畏岐北野坐天滿宮天神云々とみえたるを始とすへし大自在の号ハ浮屠氏の附会也○當世天神講とて寺宮のわさに祭るハ事文前集に京師百司胥吏至秋必醵錢為賽神會とみえ蒼頡を祭るといへるに近し○天満宮に二月廿五日菜種の御供とて手供まつる時に行て哭せる處実也といへり為終院天仁元年二月に初修菅神忌日二十五日於北野及吉祥院とみえ朝野群載に北野吉祥院廟とみえたり○琉球にも菅神の祠ありとぞ○渡唐天神の像に梅をもちたるハ多く八林和靖也野服幅巾と見えたり一夜見松中に薩天錫が作也しハ今の千本通也近来其古木の枯たる枝諸の器に作り賞せり

あまをせうび　古事記によめり天走番の義也といへり

あまのむらくも　神代紀に天叢雲剣とよめり草薙剣の一名也

あはまりねぬを　万葉集によめり天領巾をぬれのこ死をいへり頷え

あまのよひごゑ　蜑の海よりあがりて息をつぐ声をいふ也

あまのまてぐさ　蜑の捨草也ちぎりを焼てまつる物をいふ也

稀にハあまのまてぐさといふるにも作まさりゆく神をえせるや

あまのいかり　鈎の縄に石をくくりて舟重石にしておろをはさんと稱せり爭也

あまをとめこ　蜑の女子の義也

あまのすいがき　禁中にあり天の透垣なるへし盛衰記によめり

あまくちねずみ　倭名抄に鼷鼠をよめり甘口鼠をもいふなる也今いふ廿日鼠也といへり甘く人を喫て痛まさるをいふ廿日ハ極て細小なるをいふ凡鼠毒の害をなせしハ此鼠なるへしといへり○篤信に鬆きりといふ六酉陽雑俎に人夜臥無故失髻者鼠妖也と見えたるに似ておかしきにあたれて抜く髻結くあるとあらく其人恐て一三里の外に居を移せしも終に喰るまゝにして病死せり又岡崎の醫桂氏夫妻及子三年に毒鼠咬をのち皆死とぞ

あまのやすかはら　神代紀に天安河邊天八十河中とみえ古語
拾遺に天八端河原古事記に天安之河原とみえたり歌に天漢に
はしそへりまで万葉集によめるハ皆七夕の歌也
あまのひもろぎのみや　神代紀に天日隅宮とみえたり出雲杵築大
社をいふ也成務紀に所造のりく呼し名也一説に風土記に日栖宮
に作るさし八ひそまりれ義也よしまうり及み也
○あみど　新撰字鏡に𥴊をのてあみとよめり編緒の義也
あみがさ　編笠の義也又ハ菅笠藺笠などの通名なるべしまや
全浙兵制にハ箬帽と譯せり新撰六帖に
すゑとの菅のあみがさ打着て見るもなを合せる人のありゆく
あみいし　六百番歌合によめり網の重しの石也○伊勢内宮の
多くに網石と称する一種の石あり石面に網の目見えたり
あみのうけ舟　網の釜舟乃義大網にハ舟をとりくくりうけとする也
沖のうけ舟も同じ

あみやんとん　火浣布をいふてんとん語也紅毛の言語なりとぞ又ね
んぶるを文だるじふるすといふ火鼠の毛織といふハ神異經博物
志などに見えたる竹花物綸に火鼠の皮ごろもといへる是也近世平賀氏
石絨をもて此物を織なせりとぞ
○あん　餡の音轉也西土の饅頭の餡ハ鳥獸の肉を用ゐ本邦
にハ赤豆砂糖を用う黄蘗饅頭と称するハ香油の搾かすを餡と
れ○伊勢物語にあんをよせくといへるハ走名なるに案を合ふ後世案
文なとのごとくを書せ也今の義解に文案者施行已文繕置曰案也とみえ
○孟光案を擧ぐ図戴文進がゑがけるハ茶甌也とぞ
あんだ　和名抄に箯輿をあみいたとよめり編板の義あん
だハ略語也○尾よりても同義なるべし○安智のとのかりみも擔板漢
のこゑや
あんど　後日本紀に依請本居父母兄弟妻子同貫柵戸廢業
安堵とみえたり文選に百姓安堵史記に案堵に作る應劭注に喩

人皆安然如堵墻之不遷動也といへり
あんどう　行燈乃音也あんハ古音也行宮行在行者行厨行戸
行脚などいひならへり○文明行燈ハ暗燈とみえたり○兵
家に晝行燈夜行燈あり
あんくわ　行火の義にやあんくわともいへり衾毬をいへり被香爐とも
稱す侯鯖錄に臥褥香爐ともみえたり
あんぺら　本草の蠻名なると云ふむめがはといふ小蒲の名
とぞ○鯨糞の蠻名にもよれり龍涎也ともいへり
あんらん　菴羅果とかく大和塔峯の廟側に一株ありて五臺山
の種といひ傳へり皮片て自らはげ落て其痕五色斑斕たり三月
に花さく五出粉紅状にあり實熟すれて榠樝の如也実の形ハ
梨子のごとし
あんぎや　行脚とよむ禪語也事苑に行脚者謂遠離郷曲脚
行天下脫情捐累尋訪師友求法證悟也とみえたり

あんない　案内とかけり格に撿案内といへる多し案ハ
公義の文書のひかへ也其内を吟味するをいふ也今事のしだいをよく
知るを案内を知るといひ其案内者といひ事の始終を
しるを案の内といひ乖戻するを案に違ふといひ又案文
案紙などいふ皆撿案内より轉化せる詞也といへり
あむしろ　倭名抄に籧篨をよめり編筵の義也といへり後
世あじろともいへり新撰字鏡に簟をも訓せり北山抄に籧篨車
ともみえたり
あんのこほり　太平記に五六八九寸の琵琶の甲安乃郡あんと
を鑄毋て志たるを塀とめさせて又桜をも五六八九寸の安乃郡
郡とを鑄毋て圍八十三万に三重四重に組上とみえたり琵琶乃
甲ハ形をもて稱し安の郡ハ生るをもていふなれハ長つ安武
の郡と俗呼にあんといふを指なへし大物の五六をもあまハ此材せす
材木の大なるを稱する名目なるへし

○あめびと　万葉集に天都の人とよめり
あめみま　天孫の訓也皇孫に同じ○琉球ハ天孫氏の開闢たるよし中山傳信錄に見えたり慶長の頃僧袋中か南遊して記せしところも亦同し○西土にては織女を天孫といへり
あめうし　日本紀倭名抄に黄牛を訓せり飴色なるをいふへし新撰字鏡に黄牛とあめすなはちとよめり堅魚を爲に牝角を用ゆ
あめのみや　修験家に伊勢のうちに爲の天風のみやとかくへしといへりされと雨宮ハ熱田に雨宮あり祭神高龗(タカヲカミ)也といへり又信濃埴科郡に矢代の東北にあたりて雨宮とて大社ありとそ又袋草紙に天宮の事見ゆ
音にきくあまかさ山をさしつれは歌ハぬきつれる天のあまかさ
あまかさ山のふもとに御霊の祠ありとそ
源氏物語雨脚雨足なとく唐詩にみえたり袋草紙
あまのはし
栞に

君とおもひよおもひしこしハ秋やさこかくうりそふ爲乃なしハとのかハ
あめかした　天下とよめり天下第一ハ北史に見ゆ
あめのいせ
あめのとまり　雨の脚と見えたる調也
あめふりおつ　爲とありをもなかるハ巫山神女の爲なる也
あめふりとまり　新撰字鏡に霽とよめり○武備志に落爲と
あめのみかげ　中臣後に天御蔭日御蔭と見え大殿祭祝詞に天之御翳日之御翳とみえ万葉集にもみえたり西行法師
世中とあめのみかけの中にありて荒潮あひて八百あひの神
あめのおしして　天璽の光也大嘗會の事にみえたり
あめもつしき　天皇の訓後世の辞也古語の例によるへし
あめのみかひ　神賀詞に天乃美賀秘冠(カフ)利天とみえたりみかひハ
冠の光冠ハかつりともよみひことよめり
あめのみかや　神賀詞に天能甄(ミカヤ)和とみえたり和とやとよむハ万葉

集にみえたり魁屋の翁にて齋(イヘ)こりてこそつけたり

あめのみかど　天智天皇をかくまうし京の貝淵にみえたり又聖武天皇をもさ申されし天子を通して申すなるべし奈良のみかどは平城天皇也○柏原天皇は桓武帝也西院は淳和帝也田村天皇は文徳帝也水尾天皇は清和帝也深草のみかどは仁明天皇也仁和のみかどは小松帝也即光孝天皇持明院は伏見帝也禪林寺院は亀山帝也萩原院は花園帝也亭子院は宇多帝也天暦のみかどは村上帝隠岐院は後鳥羽院也土佐院阿波院は土御門院也佐渡院は順徳院也持明院又後高倉院は守貞親王也常盤井天皇冨小路天皇は後深草院也養和帝は安徳天皇也

あめのよざし　日本紀に天命と訓せり

あめのやへくも　天八重雲也神代紀中卷にみえたり古事記に天之八重多那雲に作るたなは棚也万葉集に天雲の八重掻別てともよめり

あめのしたしろしめす　神代紀及今にも御宇とよめり霊異記に御宇とさへあ

こびしあめのさしとよめり

あめつちとおひとし　源氏にいふ楽書に琴動天地感鬼神といへり

あめのかべたつかぎり　祝詞に天乃壁立限といへるをときかば壁立の如し天際也

○あもとじ　万葉集にいへる我妹刀自(アモトジ)成べし

ありくふりく　脚本蹈本の義演義文に脚色とみえたり

○あやつ　十訓抄にいへる彼奴の義也沙石集にあやつばらともいへりとあやつといへり那廁と譯せり

あやしむ　神代紀に怪とよめり彼をいふあやしといふ嗟嘆の辭しは助けむはまた挙動の詞なるべし怪異の義也

あやとる　操とよめり挑文の義也令義解に取綾錦文者名為挑文生以自挑織故也とみえたり

あやきり　舞の名綾切とかけり四人立とぞ

あやふし　危とよめり新撰字鏡に阽も訓せりあやしく哀嘆する

とみなへし又まみむめもの行にそたらけりなやらむともいふ○俗に
あぶなしといふ詞も同語なるへし○万葉集にあやぶむともよめるも
危ぶむも也なふの訛言也

あやなし　無文理の義也略してあやなともよめり鎌倉右大臣
集にあやなのむやともよめり俗にあけもなしといふに同し　かひなきを
せをもいへり

あやすぎ　綾杉なるへし香椎の文山田原平野の原なとにも
あり塔杉なりといへり蕃藻屑には黒き杉の木也といへり○草にも
名を同ふせるありよく似たり○河内えんたの八幡にはまた名あり
宮川歌合に
おなし山田の原のあや杉に風ふきなれてまつよそのみなつり
かまへ八常の杉といふ色し

あやかき　古事記の哥にみえたり帷帳なとの綾垣なるへし絶垣なと
いふか如し同書にみえたり衣垣儀式帳にみえたりふはやかなきくし兼くり

あやゐがさ　綾藺笠をいふ文あるをいふ今の綾谷かさの類山
伏の笠にもいへり○西行法師に嵯峨の野にてはあやゐ笠のそれ梛をさ
まさてかりなまびを着にまふ也といへり

あやむしろ　文莚の歌ありくしきにみえつ万葉集には綾席
とよめり文を織るをいふ

あやふくさ　枕草紙にみえたり危草は崖にやきしたひよしおふらん
もげにたのもしげなくあはれなりといへり根なし草は浜にあり朗
詠集に観身岸額離根草とよめる梵語に本あり

あやしきまもり　万葉集に神護刀とよめり

○あゆるか　万葉集橘の哥にあゆる実は玉にぬきつつとよめり
落るをいふなへしといへり枕草紙に汗あゆるといふは流るる也物に血な
血もあやれなともいへり出字とよめり文金葉集に物にあゆるを
あゆといひえんといへるは消る義也ともいへり馬の肉俗の哥に　しなと
りのれと中宮にまありけるへにかりつそ

まくらきのきりへの庭乃石そこれおりつゝつゝあゆきまそえん

あゆむ　歩行をいふ足緩の義なへし源氏に行きまひともえてくりまひ反み也○江次第に勧学院歩をつゝて敷政門の大饗のところなりあゆみ来しえくとり行装をいふ也○新撰字鏡に騎とあゆみ来へらしまあり

あゆらハ　氏に愛甲とかきあり東鑑に見えたり相模の郡名也

あゆみいた　三代実録に歩板とかきたり今もあゆみをかけるなしといへり西土にいふ歩橋也○舟にかゆきといふ一名をきみともいふ明律考に陸耳と訓せり

あゆのかぜ　万葉集に越俗語東風謂之安由乃可是とかえたり今も越おもてに代玄の風をあひの風といへりそ

あよくかめ　万葉集に見えたり老くかゆれの義やうの反ゆとよことだなしみえ反め也

○あら　嘆ずる詞なつまハあなとにせり神代紀に喜心哉と

いかられしやともいへるもやさしきあり○又てはなかゝれともにあらとよ又にはつゝえくとり○魚のあらかといふハ鹿の義なへし○魚につ種あらしと称するもの有り鰤魚也といへり産後の婦人なとに用ふとあり鰤とも云ハ二合の仮り字也○三才図会に阿羅魚あり十尾一頭乃異魚也○荒津ハ三代実録に見ゆ筑前那珂郡にあり

あらち　越前にあり荒発とかけり関あり或ハ荒乳とかけり

あらか　殿とかけり在所の義ときこゆる也とあり

あらの　荒野といふ也日本紀に曠野とあらのとよめり人のゆかぬのをいふ也

あらを　万葉集に荒雄と見えたりますらをの也

あらや　倭名鈔に礦とかけり粗礪(アラト)の義也

あらく　新撰字鏡に粗とかけり神功紀の事に見えたる乃

あらゝ松原　みえたりあらゝしれる義也

あらゐ　新居里ハ新千載集に見えたり近江也○荒藺崎ハ淡

後撰集にみえたり武蔵也○倭に荒堰といふハ土を堰也今切の渡りにも
以て也
あらむ　非をよむ有ざる也是の反也匪も同し不字をもよめり
つき文字にかり又徴もよめり
あらぬ　不有也あらぬもあらぬ君なとハ非字もかき
非参議の非の如し○倭にあらぬハあらぬをいひ又轉
してあられぬなともいひ又轉してあられもなきなといへり
あらはに　神代紀に顕露をよめりあらはなるをいふ直指抄に
あらはならばあらはしけるといふ義也といへり
あらはす　今顕の義説文に顕頭明飾也とみえ日本紀に證字
験字万葉集に書字異紀に裡字なともよめり著も同し
あらたむ　改をよめり新にするのをいふ日新の工夫といふ語も
の義又革もよめり
あらけぬ　神代紀に散去をよめり粗別ぬの義也

あらたよ　万葉集に新世又新代とみえたり
あらとこ　万葉集にみえたり荒床と書り則さるようにいふ也
あらうら　俗語也荒形の義なるべし
あらはか　日本紀に荒陵とよめり今の茶臼山也よて天王寺を
荒陵寺と称し太子手印記に荒陵池もみえたり仁徳天皇の陵とも此に
葬りまゐらし也天王寺小社あり欽明天皇敏達天皇用明天皇の三
皇を祭るとも藤原雅教住吉道祀にみえたり又守屋社あり兄弟二人を祭
る束帯像也又太子堂中ハ太子左ハ五経博士右ハ曽我大臣同紀にみえたり
あらしを　万葉集にみえたり荒し男也といへり
あらまし　有んと欲するをいふ後にあらましきの義也にいひ隠れ
てもいへり万葉集に欲字をもよめり　堀河百首に
あらましにいひしことすハなけきてもかくまれの日もなき
あらゆる　所有をよめりあらゆるいひをうかもしを
いふ詞也又明律の應有をよめり

あらうみ　荒海としるし入江なとをいへり万葉集にあらうみを
よみたるも又是也○荒海障子ハ清涼殿の北の廂にて也せるを
あらしの　中臣祓にいへる荒野ハ荒山荒野
に同しく住家なき所をいふ也上國をいふハ荒墟の義熟せさる所也
○あらゝぎ　阿育王の塔のこと捨芥抄にみえたり智論に阿育王得閻
浮提王一日之中起八萬塔とみえたり○今の俗木蘭をあらゝきといへ
るも杉なとなれはいふ也伽羅木也といへり○倭名抄に澤蘭を
さハあらゝきと訓せしも文字によりて荒実とかけも澤蘭ハ形状の
ちと佐藤に似たる草白花さくをいふもの也
あらもと　倭名抄に糲とよめり粗元の義也ともいへり
米裂の義也今いふ粉米なりといへり
あらたて　延喜式に舂稲皺以荒筥とみえたり
同義成へし
あらいそ　荒磯也後醍醐天皇源彼翁より伯耆名和湊に

出船したまひし時名和長年に始めりし家鞘長年か後裔荒也り
その内にいやしき苫のしたに是ひとつのあれ居らんのもちいたん
と所に直衣なしにつくりて今ハ昔りと給居さるまいて
荒まめやよろくも给のあら様と海母のうへにてめしまゐらせ
長年か忠功後代の人もおしせんかたのふおもしきとといへり
あらさか　荒坂ハ紀伊の也正平中土佐頼康か宮軍と戦ひ
し所也
あらまき　倭名抄に苞苴とよめり荒纏の義也今俗捨まて
鯛のあらまきなとといひ今つとといふ是也○新撰字鏡に秫をも
よめり又やしまきといへり不耕蒔也と注せり又稿もあり
あらひこ　澡藥とみえ洗粉の義澡豆ともいへり文豆と最とれ
あらがき　梁塵抄に釘母の始也といへり荒垣の義也更級記
に清見か関ハ海まてあらかきしたるとみえたり新後撰集に
曇なく月すみわたるや河口の関のあらかきたえまさるらん

聖武紀に到伊勢国一志郡河口頓宮謂之関宮也と見ゆ

あらしこ　荒しごとの義荒けづりかんなといへりあらしこ
この給なしえたり○軍卒に中る小者の類を呼ハ嵐子なとし
からりて農家の下作するをいへり佃奴也

あらくさ　祝詞式に麁草とみえ曠野に生する草也一説
に生れのまゝ汗をぬといふ

あらしハ　あらふ以て嵐羽の義也

あらちを　暴き男の義衆へし猟人などの称にあり

あらけなし　荒氣なき也しハ助辞也といへり

あらえびす　徒然草にみえたり日本紀に麁蝦夷熟蝦夷とみえたり

あらめいも　日本紀に異母妹とあり舊事紀に異妹とも
みえたりあらめハ疎妻の義古へ異母妹を娶りし事ハ禁れし文忌さ
かしハ紀にみえたり

あらひまき　苗代の時籾を水中に漬され洗ひあらて蒔をいふ

砂石の田新耕の田にまくよしといへり

あらひぎぬ　万葉集に洗衣取替川とよめり袚河よりいふ也

あらひさん　朝野群載に洗盤六口とみゆ

あらひがは　延喜式に洗革とみえたり

あらよにごよ　荒世和世とあり清涼抄に六月晦日神祇官
奉荒世和世御贖事とみえて臨時祭式に荒世和世御服ともみえ
たり○公事根源節折の條にあらよにごよと申す事をしるすとし江次
第に荒世卜部進置竹夜於庭中席上云云次和世参入如荒世儀
といへるハ竹の節をとりて大御身の長を度る也此時中臣の女奉仕を
荒世和世ハ荒妙和妙とりよめへし

あらめいろね　古事記に庶兄を訓せり

あらひとがみ　景行紀に現人神とあり日本武尊の俗に天
皇をさして宣へり天神の人にあらはれましまたといへり雄略紀に
現人神とみえて一事主神の自ら宣へり万葉集に荒人神と

つえ曰

あらぶるのかみ　荒き神を和めしむる也よてみそきの奇なし
まゝあり

あらまほしや　南　斎に山居せんとおもひ立ぬるあらましするおりて

あらたまつき　源氏に見ゆ三ノ表中新月色の義也

あらみさきのかみ　男女の中をさくる神也といへり伊勢の斎宮にも
あらみさき姫と見えたり　蔵玉集に荒前姫ともあり天ノ神なるへし
○盛衰記に神功皇后三韓退治の時に天照大神より二人のあら
みさきをそへられて舟のともへにたちてまもらせらるゝは荒魂の義なるへし

あらはかきたて　神代紀に露とよめり顕はに掲焉の義也

あらふこのもく　荒和祓とよめり六月祓をいふ也

あらふねやしろ　拾芥集に見えたり新船の神社にや
筑前宗像郡興嶋にあり今も其地にあらふねといふ船の形し
たる岩ありとぞ又信濃佐久郡にあり又上野の碓氷嶺に荒船

山なり

あらみがはのおほみへ　荒見川祓とあり大嘗祭にいへは洗ひ川
の義なるへし昔はいかゝなりしや今は紙屋川にて行へり散斎の前日
九月晦を用ゆ

○ありか　源氏に見え在許の義なるへし字書に許は所也とあり
今在所を書にもかよへり同じ也

ありづか　蛾塚の義蟻封蟻垤なといふ義なるへし陸佃か説に
蟻場謂之坻亦謂之垤以レ至以二蟻之微一而能為レ垤用二其至一也とみへ
たり○蟻の塔といふも塔のありよくみなけて五重にて一尺五
寸許なるありといへり

ありさき　袍の両腰のさかりをいふといへり

ありひし　日本紀に南字をよめり韓語也

ありふる　世間に在て年月をふるの意西行法師
行とおくへさきらにもしき命かなありへは人やれもひおもふとて

ふき反へせ

ありのなか　信經に千町の堤も蟻穴から崩るといへり　後漢書に堤潰蟻孔注に韓子曰千丈之堤以螻蟻之穴而潰といへり西方合論に一綫之蟻孔能穿連山之堤といへり

ありこせぬ　万葉集にみゆ在来せぬにもといふ義唯今迄ありしかはりにせぬにやといふことなりといへり

ありそわし　万葉集に在果石とよめりそのほかいふ如くわしは欲の義なるべし

ありがさし　跡をも梵志より出たり源氏物語にみえたるも字れなし今俗の義にはすこし恃せり詞花集に世中さかしくみえけるによめる

秋ならし亭の主かるむ萩か枝の末葉に露のとまらぬ世や

ありのまゝ　有の儘の義をも根とも見えり　和泉式部

事たりてこのまれしくるやてる部のことを我もしつげなん

ありそつる　世に在極るの義也ありそろましき世あさえとり○在て後在つゝもかく在経てなかしふるなりや

ありがたし　万葉集にみえたり世に在て有がたき也

ありかしくも　あかとこえばやうそ消りあの作といふ也

ありのまさみ　有の荒る也古今六帖に

ある付はありのまさみにさらへばて恋しき物と別きてぞ来る

ありやなしや　伊勢物語によめる拾遺集に

なりて心はありしも世中のありやなしやのきゝ後引されありやなしや

ありしかもありしぞ　本有しやとしも今はあるも変りゆる也

○あるじ　主ともあり又る人ともいふ神代紀にみえて成る也家にあるじの義也万葉集にあつかしもうへ○物語に客とあろじといふもこれより伊勢物語にあるじまうけおしいつり文徳紀の家に飯をそなへしいふを上右の侗にみあるしつるまつきといふも同じ　世説に設主人とみえたり

あらし　日本紀に上をよめり韓語也
あらし　方言に弱をよめり俗に嵐まじく猥なとにいへり
暴字をよむ也○東国にて八あらくるしといひ西国にて八あらまく
やといへり○荒ると定るといへ八結を解といひ深むを浅む
といひ向を背くといふの類也
あるもの　伊勢物語にあるものとおもひたらん新古今集に
あるは忘れ系にわく衰の消えしやらぬおもひそや人のこゝろも
あるめのかしく　住吉物語に見えたる俗にあるべかしきといふ詞也なるべく
しつらひいふも可有かりし合のことといへり
あるにもあらぬ　よそかひなれる也又あるにかひなきともいへり
○あまや　古歌の月たにあまやかにあくしきひれてはあるは新人
ことせまとらふにあまやあるてをまさぬとよめるは天をたやのことせし
いへり○あまやといふ俗語も一字よみのことせあまやかとれやといへり
あまたゝる　延喜式にみえたり賀茂の御生に用ふる器也又五色

絁各三匹阿礼三具料揚筥三合盛阿礼料といひ大射の條に
あまの幡といふるもみえたり○三代実録に阿礼乎止女賀茂
祭宣命に阿礼乎止巳阿礼乎止女走馬進良留止申賀茂齋
王卜定に皇太神乃阿礼乎止女御杖代ともみえたり○世に
集になまとれるもいへり
あまづく　万葉集に継代より生継くれてきたる西せきく連
読の義也
あまつく　万葉集に安礼衝也とよめる吾就の義就八列をも
いふ仕ふるせりと反く
友京の大宮仕へなきまつくやせ女なともは志きめさんかも
○あろ　なりんといふも俗にかしといへり
○あわゆ　万葉集に玉の緒を沫緒によりてとみえたり沫緒
結形にてこそけるを緒といふ水へし清少納言にかたまにむすべる緒も
よめり堀川百首にあわをとよめるも同じ○沫緒結といふ

あり此結ハ綴らる如くなくてとけさる也されてもきれさるを云
まゐる沫結ハよりたる糸にて結ひたるをいふ倭名鈔に結菓
於加久のあわと訓し形如結緒此間亦有之と見えたり拾芥集に
出されハ淡のしく糸いゐるれやむまへともり粉なきよりん

あわしほ　倭名鈔に白塩とよめり沫塩乃義也今の合塩
乞也

あわつぶ　沫立て円形となれと粒といふ也硝子なとに氣眼
といふ乞也

あわさく　古事記より出沫盛る也なる言く沫佐久御魂ハ猿
田彦神の別名也

あわもり　琉球酒也泡盛の義蒸米を麹に和し水をかさね
封し醸して熟するを甑にて蒸し其滴露泡のやきをとれて
甕に盛て密封し七年の後用ゆしといふ薩人の言に本兵の中山に
成るあさ三年にて代る酒を嘗さしたなし彼に在て八よく露酒を飲

りすかるに及んてハ帳にかる事あるときハそ布帛の属深著
に黴をなさるに露酒をそゝけハ色忽ち鮮明なるもまた奇也と
いへり

あわまし　沫を吴也重之集に
山川にみなきし淀のあわハつき鼓乃旅りしあわもすくらめ
○鄙行る左事ハ栗を蒔事をそあハの仮名をいひかくるハなるり

あかしほ　倭名鈔に澱とよめり藍汁の義也

あゐだる　靛花也といへり藍蝋ともいふ

あをうバ　白河院の御宇に鬼なり小児女を捺め奪ふ乞と
藍婆といへりとそ

あゐざま　藍葉をかさめおるをいふ○無名異ハ石の名なるをいふ名
なるハ大小まちまちにて形色の似よりより称まる如くし

○あゐり　倭名抄に平安とよめり淡路の仁多也○淡乎あわ乎に
あへくといへるに色そへるや今なし淡乎なれさやうなることハえん

ゆるり

○あおり　船よりいへ淡路の笑丸て柚の中通るをいへ也りだあ

おりといふ六郎舳のあおりをいふとぞ

倭訓栞中編巻之一終

国立公文書館
National Archives of Japan